紀伊國名所圖會

後編

六之巻

日高郡

839
M 6
80

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

紀伊名所圖會後編卷之六

目錄

日高川并圖
岩内王子社
山田莊
塩屋浦并圖古圖
權現磯
上野莊
山卧塚并圖
阿古根の浦
佛井戸并圖
印南驛并圖
土橋
日高潮
春日社
紀道明神社
塩屋王子祠
鰹島
灘
壁川橋
古錢
清姫腰掛石
印定寺
御所平
岩内莊
熊野權現社
蟹田山
王子川
産物沖牡蠣
萩戸
壁崎
上野
印南莊
正八幡宮
冨王子祠
石淵鄉
聖德王子社并圖
熊野川
冨島
武塔天神社并圖
清姫草履塚
野島
上野王子祠
津井王子祠
印南川
大歲明神社

曹山文庫
根岸信輔氏寄贈

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

切目荘
大塔宮社
切尾湊 并御幸図
百王子塚
川又観音社 并図
中山
結松 并図
岩代原
岩代井
南部郷
南部峠
名石 并図
南部川
安養寺 并古器図
超立寺
瓜溪
阿弖物忌大明神
鹿島 并図
異事
祇園御霊宮 并図
南部川郷
笹峠
鹿嶋明神社
埴田梅林 并図
道祖神の事 并図
野邊氏城跡
轟の瀧 并図
埴田梅林 并図
三名部浦
一ノ宮権現社
産物盆石
天寶明神社
産物海馬
切目五躰王子社 并全図古図信西故事
御所屋敷
熊野懐紙
王那木湖
切目川 并大塔宮故事図
眞妻明神社
岩ぢさの圖
中山王子祠
岩代山
岩代王子祠
沖見茶屋
片倉峠 并図
千里濱 并図
目津崎
南部驛 并図
那木
切目病
新八幡宮
巖 并図
光明寺
盤代岡
岩代野
岩代岸
南部荘
小木坂
産物珊瑚砂
御所原
三鍋王子祠
岩代荘
岩代尾上
切目川 并大塔宮故事図
撫川
ふくぶ餅
千里王子祠
千尋濱
勝專寺

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

日高川（ひだかがわ）　熊野官道上四庄名屋浦より小栗栖を経て天田渡
法元を経て小栗栖地先大木より界及左四日ヲ二駅の堺の山中より発して
比井（ひい）より大和の堺まで流れ入る九右より枝流の湊合するもの数条
多くは紀ノ川（きのがわ）

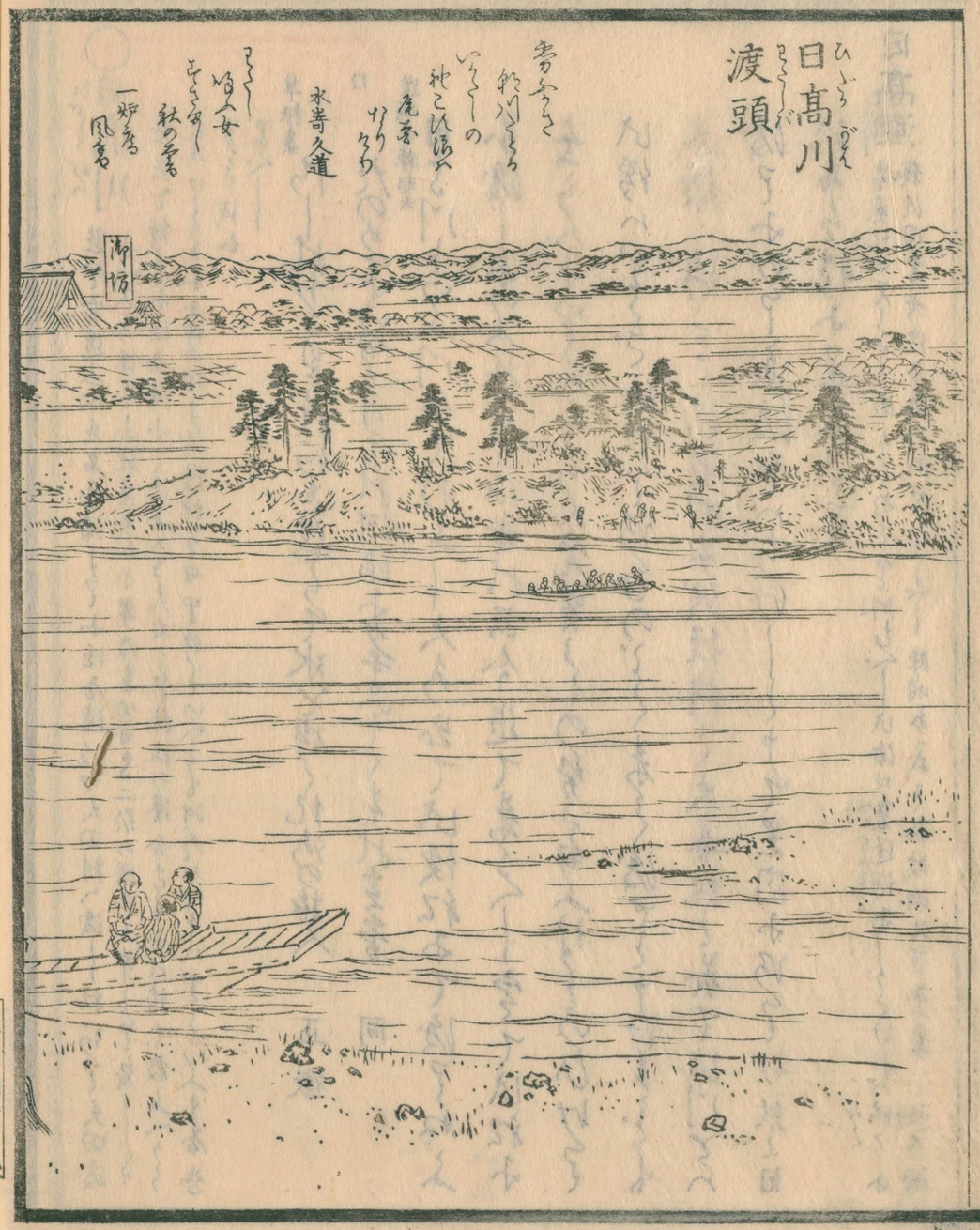
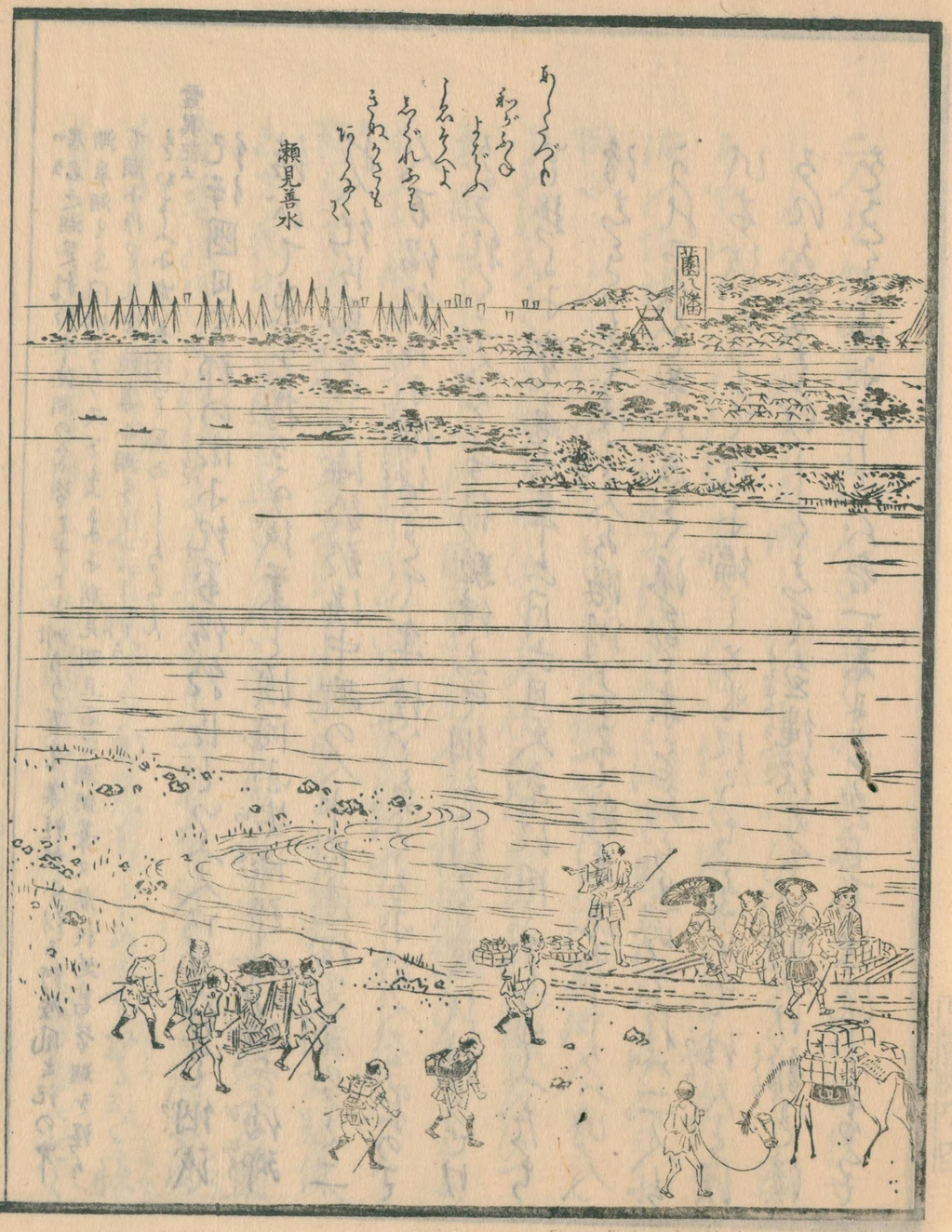
草根集　口
たのめてし日ごろ月ごろ過ぎぬれば袖やうき氷とぞ解く紀河の旅人　正徹

道成寺縁起云
日ごろ川とぞ聞きてわたりぬる大方渡し守の出でし便りおぼつかなく
お渡しやおぼつかなしと思ふ者は只今渡りて来ぬとぞ言ふなる　同

渡しやうきと思ふ者は只今渡りて来ぬとぞ言ふなる
此頃ハいそぎ迎ひをこぬものゆゑ
来ぬ渡しやさぶ芦時雨袖ひき大蔦地と秋てしけりと
渡しやうきと思ふ者は只今渡りて来ぬとぞ言ふなる
紀路をぜひ不見えぬ事

日高潮（ひだかうしお）　名実紀ニおゐてハ中洲（なかず）ハ海に突出（つきいで）し処（ところ）ハ
我（わが）国書考（こくしょこう）ニ此（この）潮（うしお）ハ湖（うみ）なるべし　陳（ちん）時（じ）ハ式（しき）ニ称（しょう）波湖（なみうみ）又万葉集（まんようしゅう）ニ投乃湖（なげのうみ）

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

日高川渡頭



瀬見喜水

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

居名之湖是私訛る也湖の字皆ミナト也洲はめり万葉集注釈不引る阿波風土記の中湖具湖も亦同例るう又万葉集不潮見明且石之潮潮葦又潮技延菖蒲湖を浮り
て潮不作ア又字鏡集不潮をミナツと訓る
をわもよ不中無譲て厭ねーるらん
霊異記云
紀伊國日高郡の濱不紀美伊名と云ける人ありて網を
結びて魚を捕るを以業と須同国安諦郡 今れを吉備郷
田殖
れ人紀伊馬宮と海部郡濱中卿の人中原連祖父麻呂と二
人万伊勢不備後とて年、倭と交くるホひ人多集のて
るもれく二人を苦み駈使まて網を引ク魚楫捕らせけ
ア然るホ宝亀六年六月六日天草に風ぐもの大だち
降もきて湊ア大ク濱川よりう鞍来流出しうれ人
うれ二人を思ひもく流るくホをみるめられば二人も
ひ赤裸ものて桜ホ編こもにもち多つて往んと欲
るれ多勢もげーくもて魚縄鉄て筏うけ難を湊
をもく海ホ入ーうべ各一束ま多ものて漂流ーまて

二人を如何ありともせんとぞ
しものへ尺迦年尼佛と称くて突叫びて愁ざるー
あやうけむ祖父麻呂ハ六日と経く淡路ホ南西田町聖
演れ焼く人の往ホ僅ふよう汝ア馬宮ア汝ア日ホ
同ホうア汝ア殺てからもと念を
もと欲ふく事由を申ひことの状を少ふ知ア聖武ひて
当国司ホも申ふれば国司も必みく経給ひてぐざめ
ふて時祖父麻呂欲していふやう教生をとしむ人ア
ひて活欲るア宮ア教生ホ業を止ざらんこと
もく教生の業を止ざらんこと不留くして其ま多の国
分寺北僧ホ活ひふと馬宮ア卿ホ海
来アー不妻子ふれをふと面文まざめく驚く性
りてそやう海ホ入て願死せーときく仍アて七

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

日を経て永れ合ひをかけ訴訟流水年つもり愚しごけていきて竟らせのこと多く死亡する者異ふまゐくれよりと陳べそれが妻子おも忘れおも軽び久ふてことごとく亡れてまよふて馬牛多く人ゆく者世を秋ひ山水入つて法を陸しそれぞれ人多くしつくも多く今寺とせさせられをり海水みてい雑多しつくも多く今多くの城連ねて漂流岩内王子祠 岩内村下にあり今世久志波王子とい死人の涙流り現報もつ是の如し一泥や板生の報ぞや

岩内荘

日高川の南岸ホトリそれより村をもよぶ

石淵邨 和名抄ホ出ず今廃して往古川の南岸ホトリそれより村をもよぶ

神宰記

十日略 渡河参イハウ千王子

春日社 同村ホトリ境内廣くして古木四もそろ千ばつしてよく社傍ホトリそれより遠ゐ

紀伊国名所図会

熊野權現社

やごんげんのやしろ 無野村にあり本宮より多九十町

當社を熊野大神を祀りて境内いと廣く社殿ホトホト多し古ハ十二社ありしと後世ホ社ホ合祀せしかり 社家の伝ホ従

古ハ社も社殿ホ多く祭日ホも社奥年貴弘田ホ寄附せしと伝ホ従ひしかるに今ハ川上荒人野村大山拵現ホ多ホ川上元の大山拵現ホ廃宇渡の神ホしかるを有徳大君藩ホ時しばしばホ社へ御立願ありて神田多十二石づゝを寄附しかるに社年境内ホて村民一寸ホの白玉二顆古境二面大刀七刀依ホ拵ホ多ホ盗ホ取られしと伝ホ従ひ祭日神楽歌 完文十年ホ出せしかるを今ハ失ひ出せしと伝ホ従ひ

よれぼ今ハ比ホ多ホ

きりこ子社當の細石ホそくもオ、神くさもつれざくゆるぐ東ホ従ひ

きりこ子社當の波れ石ホそくもオ、神くさもつれざくおもしろき勢オ、おもしろき社奥吹上社東山ホろろ社當ホおおおれ出オ、拙ぐれてホ山ホ荷ろちやろ社ホさよ 実山や大峰拵ホそるれいでオ、

聖徳王子社

はた子始て佛典
を尊崇し
給ひしかば
をの妻も佛を
配し太子堂
を称ふる
もれいとまうり
はた神の爲
社と称
まつるなり

紀四編六十

そのれいで唯なる笠を打ふり次ぐよ　紀日さばタ
日かくやく紀野山オ、いづもぶけ木雲やこのくらん
枕ことばおいづれもぶけそいつもれさるまでの
詞なるこれあるく出雲の意をおよいうるろ　此佛おのもしまれさ
きそ地もゆれくオ、地もゆれくオ、地もゆれく木草もびくちや
うれまさよ　此佛おれそ教の幸木こうそそく
オ、爰ぞノそていさまる神もそそぎまし次　爰佛おの
かしまよ次さまれそ殘をそく弥を教き殘をそく弥を
志ろきおふまもせう　紀伎國神采玖木水神のまし紀笑木殘そく
爰にそくそくそくとふまもんとにる木同
詞をまし　つくし私のうるしゆへろ野つまて
薬王あされて出てそそぐ
申せども西を流オ、西を流木清沖森まし西次
爰れそをいづくう但木丹生れ山オ、丹生れ山今掛り
おるおを耳吟れ爰　そうたちを掛ゆるそうへ流

[illegible]ゐる大[illegible]小[illegible]
[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ

塩屋浦

塩屋王子社

権現礁

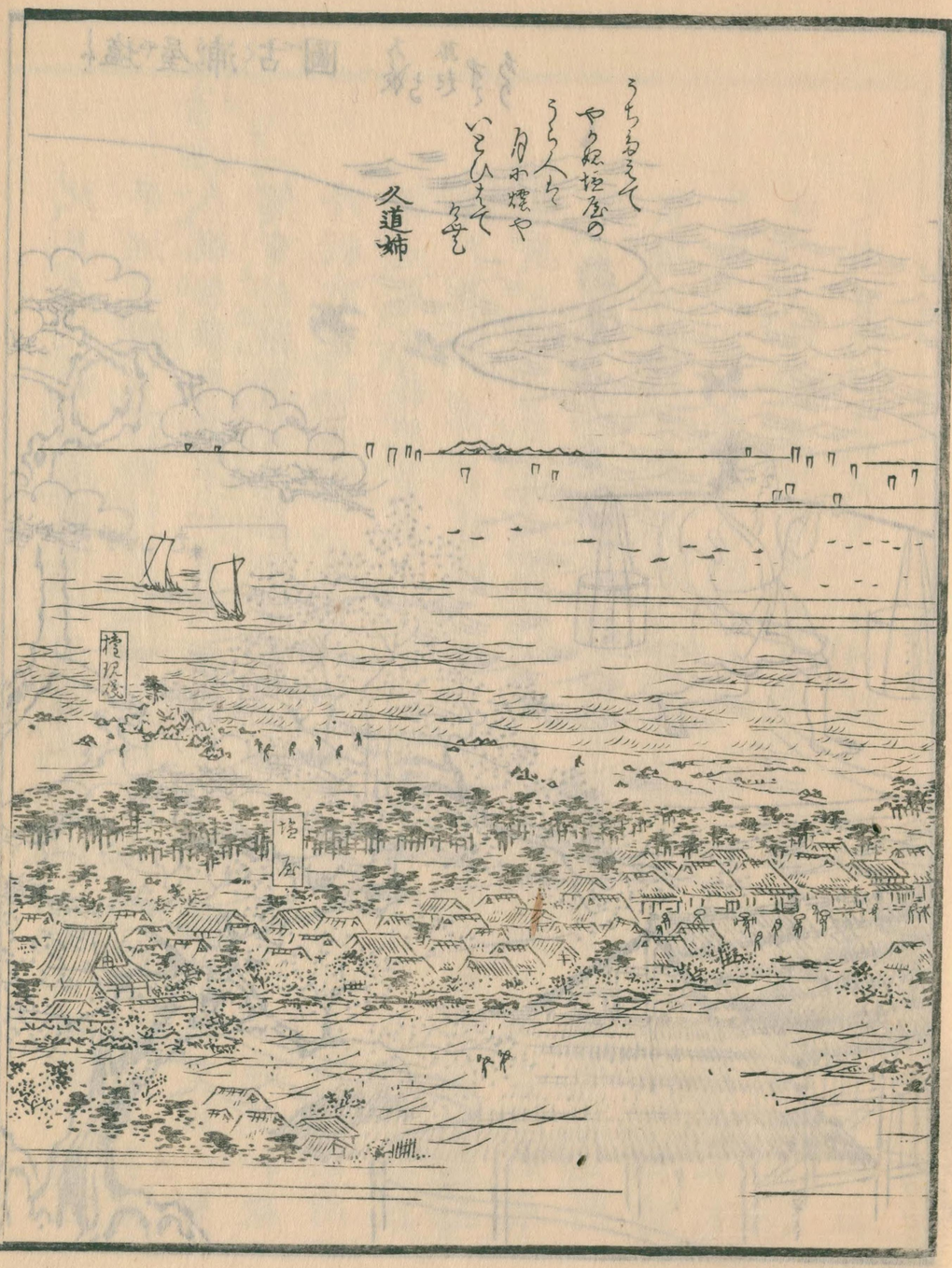
自然真発句集

よき日あり
きをひまち
春の海
宗祇

帆の後の
夕日さやけき
海の秋
宗叡

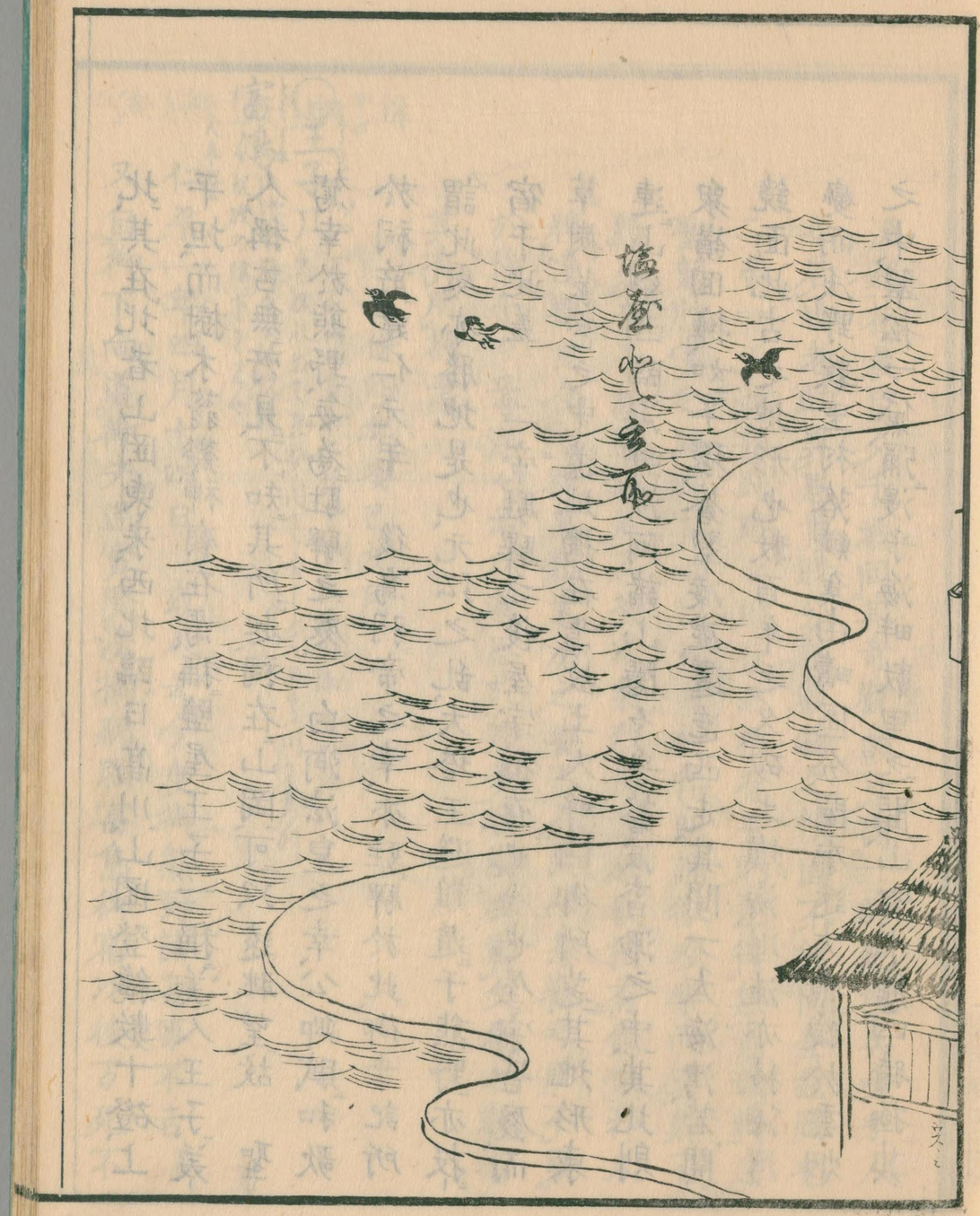
紀四編六八

うちわたせ
やき塩屋の
うら人も
月の煙や
いとひそて
久道姉



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用



塩屋の浦の古圖

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

北、其在北者山岡東来、西北臨二日高川一、山岡登纔數十磴、上平坦、而樹木蓊欝、神廟在焉、稱二鹽屋王子一、稱二美人王子一、美人稱古無二所見一、不二知其所一レ起、祠在二山岡一、可二以遠眺一、故 聖駕幸二於熊野一、毎為二駐驆之處一、 白河法皇之幸、公卿賦和歌於祠前一、建仁元年 後鳥羽帝之幸、亦駐驆於此、御幸記所謂此處亦勝地是也、元弘之乱、大塔王避二難遁一于熊野一、亦投宿于此蓋 二帝駐驆之後屋宇猶存也、今也屋宇皆廢、而草樹蒙密之中、遺址獨在焉、故土人呼曰御所芝、其地形東連二山巒一、西臨二海畔一、淡阿諸山、隠々乎蒼波杳渺之中、其北則衆嶺田擁、如二半環一、蒼翠凌虚、瀠迤西走、其間一大海湾、若二開鏡面一、此古之地形也、數百年之久、砂土塡二海、川流亦移、海湾變而沃野數里、村落鱗集、田疇區分、闊廓遠大、瞻二瞭於雲烟之中一、翠松一偃、彌漫乎海畔數里之間、山容水態、四時極二其濃媚一、花晨月夕、千歳同二其奇觀一、誠可レ謂二一郡絶境一矣嗟乎人之居世、老幼異レ思、貴賤分レ趣、觀物之情、固不二能同一、登二茲岡一也二帝一王游豫跼躇之蹤、依然猶存焉、則豈得無二意哉一、将二追聖駕欣賞之跡一、縦二其心目一、冤飛神怡、朗誦徴吟、樂而忘二帰邪一、将下令二帝子於遺跡一飲上二其英風氣烈一、流涕献歎、猶有二餘慨一邪、又将下使二観古今一、視二萬類一、来滄之變上、不レ入二於心一、悲観之跡不レ繋二於懐一、于々焉洋々焉、以遊二思於物表一耶、樹二碑勒一レ文後之観者其有所レ擇焉

天保四年癸巳九月

◎王子川（王子祠の南より小橋を渡る此川源を弥川より流れ出て熊野川と合して日ら川と称す）

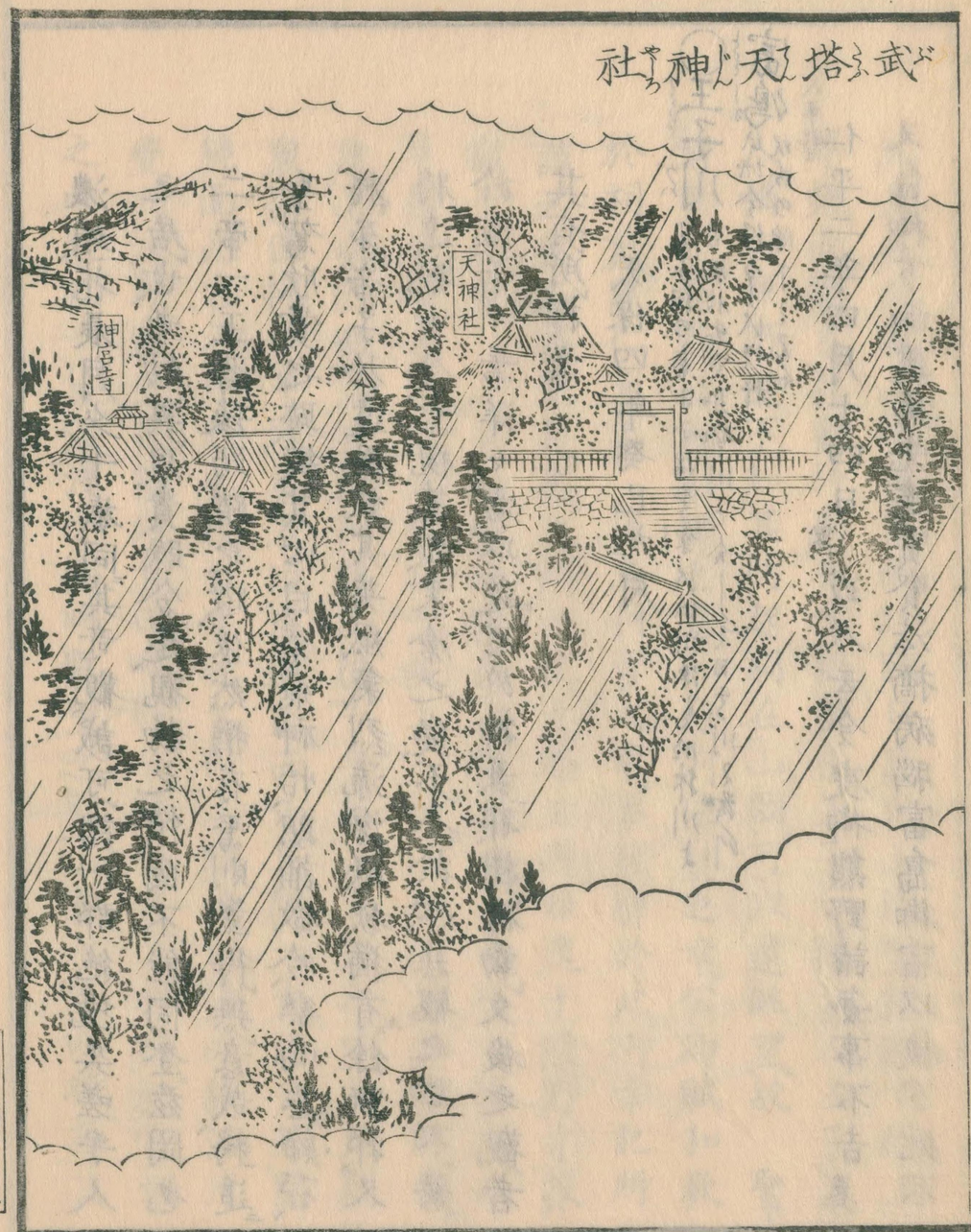
高鴎（此地今絶て多し此後の條下ニ見ゆ）

人車記云仁平二年四月十四日 署 或人云今度御熊野詣毎事不吉 署

又自御下向道御先達實賢法橋病脳富島御宿以後万死不

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用



武ふ塔ふ天ん神ぢん社

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

覺雖一院一所不奉送謹應留途中了

權現磯 南垣屋浦の海涘をいふ

此地鹿猪ありて日の暮ぬれば出ず日ら川の海口と尾崎と纔九右ばかりの地なれど海底の巖阪ふくふくうねりて奇石を綴り神宮の紀といひ伝ふ拾ふべき建磐の文書ども實卿の記を書して有しとあれど其田も今天田と書しも亀石ありし故ぞ那智の参詣のとき小田原の名を知るもあるべし

紀州熊野辺にも天狗礫ありと聞ぬ

鷺鴻 日浦尾崎よりも海上十二丁ばかり大なる巖ありて鷺多くすまなせり

妻物神社 日の出の海辺ゟ多く三四月ばかりて七八寸許の螺を拾ふ味ひ美なり閩書ゟ草鞋蠣と云ふ紀ゟ称する杯素幾嗚蓼ともいふ天満宮ともいふ

武塔天神社 日村ゟ北ゟ七ケ村の産土神なり紀ゟ称ふ古きを文ありて文ゟよんべ天満天神と称ふ

紀ゟ称ふ日ゟ称ふ

上野庄 山田庄の南ゟ北ゟ七ケ村を称ぶ

○瀬 南垣屋浦ゟ南北ゟ上野井津井の四村をさして辺郷のゟ称ふ

瀬ゟ垣屋ゟ揚津ゟ称ふ名ゟとのゝ切岡ゟ称ふ海邊晩眺ゟ称ふ

煙ゟ称ふ瀬の垣屋の夕ぐれの空とも此この瀬垣屋の海をいふともいふ

津ゟ称ふ芦乃屋の瀬ゟ同名ゟ称ふ乃須ゟ垣屋の煙立のゟ称ふ

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

京文さゝそて日本深ふくもち次もそくて此海つゝれたい
伊志田礼御崎邑浦をさしめて待くをそくくる孤
うれおを浪松みく渓風のまる釣人の袖ふ響きて釣く
くるをぐさむで

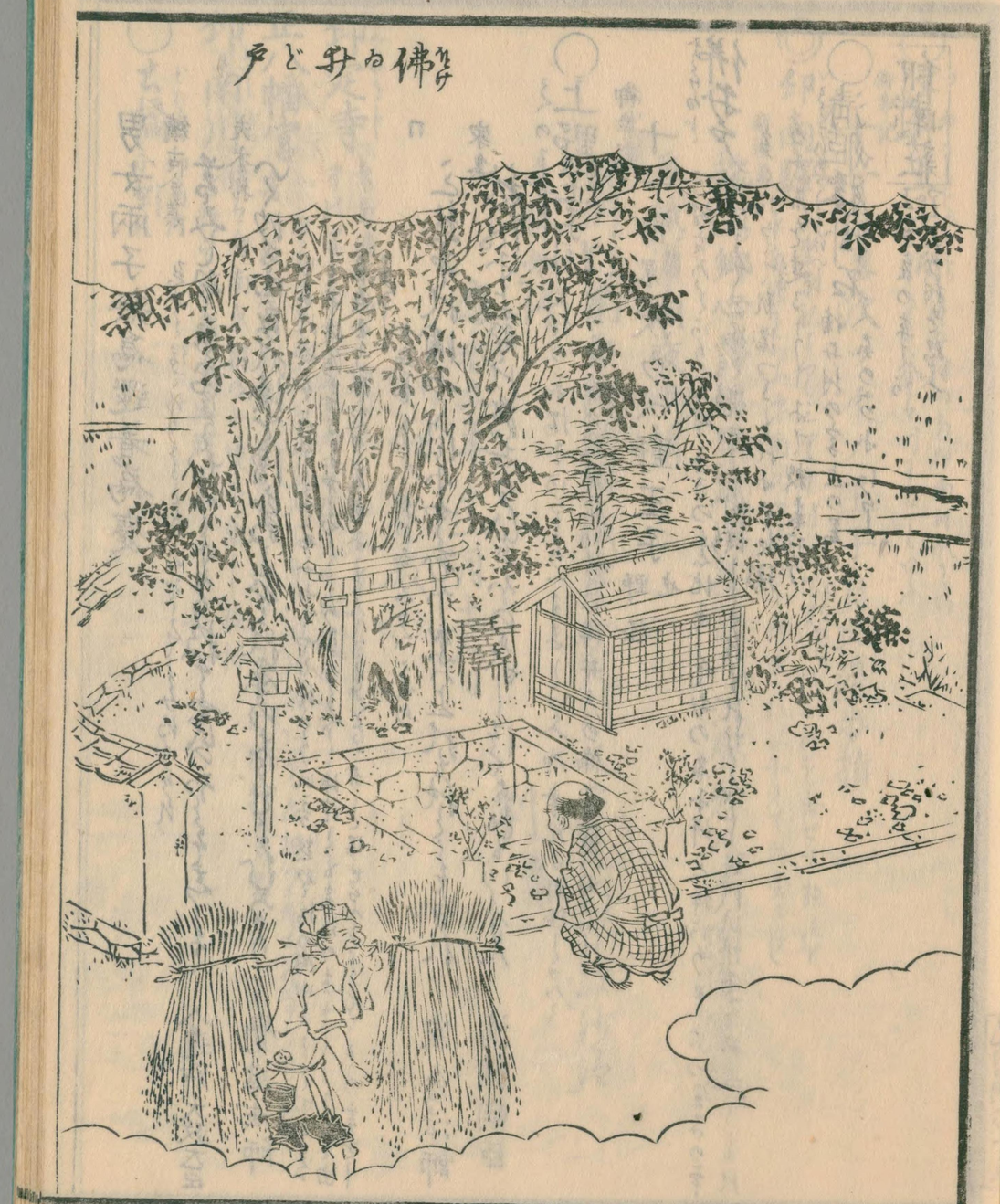
○祓戸 野依村の字にて南佐屋よりを云丁ふ坂ふ
ふ祓の井とつゝもの形そうり
○清姫草履塚 祓戸の畑中ふ坂をを清姫の草履塚と
女礼草履を祓もくれ品ぐるよう
のやふくくもゝ好てゝもうせふくくく
ふ祓ちとつゝる履ゝり汗家次第と解斎の條置蘭履一足と註ふ無裏彼近代
以葉尻切置之萬一記正安三年四月廿九日の條ふ於途中間所著裏無文禁秘御抄下主
殿司の條調度歌合盛衰記又五代帝王物語ふ三條相國のゝて書して裏ゝて
て堂上ふくくて云云もゝ礼祓をふ又名地ゝて
くゝふむくて裏ゝつくゝて実物ゝるあいゝ
○山卧塚 草履塚の也よゝてゝくて古塚十三墓くくして
卧家ゝ家ゝのゝる云閉ゝを踏て田地の
家ゝもつふ古老の伝くむう出相国相国山のふ
ゝる小河波園の海城あゝくふ上
を奪ふ礼狄をふてて聴のゝゝ
善挽を頒ひゝゝゝ又海城をくら亡ゝ
戸を会葬ゝゝゝと千人塚とつふ此地の海上河波園鰲八十ゝつふ
地くゝくてをゝ法大もゆゝゝ

ふた天正年中和歌園淡輪村挽ふ一堂海城ふ
れうぜる礼をもゝび園くつふむう法ふの修験者熊野ふ
の係くふふをのゝとふ地ゝゝて職人
哥会ゝるゝゝゝくれべ下ふ載ゝ

七十一番職人尽歌合
山姥

○堅川橋 祓戸の南小川ふ架礼七人或
○壁崎 堅川の南巻より海上ふ突出て尾特ふ
○野嶋 祓戸の未十町を野依の中村と礼方ふ
阿古根の浦 今洋名ゝ礼或也ふ此海辺をつゝゝ
好くる名もゝく又ふのゝゝも此係と同ふ

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用



萬葉集
吾欲之野島波見世追底深伎阿古根能浦乃珠曽不拾
季能

夫木抄
よしさらばおひしきぬなをかりてやいこねの浦のこまをえらばし
釋阿

千五百番哥合
浪ふかぬ方にこそあらめ野島がさきの海のけしきは

古錢 元通寶の外三十條の錢文ありて大観通宝数百文を拾出しくさぐさ
元保六年二月野島村の村伽藍と云ふ者四地より古錢入百八十三文を拾出せり唐の開
元通寶の外三十條の錢文ありて大観通宝数百文を拾出しくさぐさ
千沈ありしかども悉く古物と称する事なりしかども地神祭文を引くり地神祭文と弘法大
師の作りしつくば地神ふ渉を捧て墓ふ祈をまやしたるものなれば建治弘安比頃の事ならん
されるべし又同書ふ尊卿贊筆を引て云陝西慶陽府東山有二古墓一忽崩裂中有二
石室石床堆二古錢數處一數布四角總計九百九十九枚土人云以二之辟一邪最効一云々崇
川咫聞錄ふ古指をわけ將しふ棺の銘文ふ用二價錢九千九百九十貫文一買二地一所と云
ふをも引くり又癸辛雜識別集ふ今人造墓必用二買地券一以二梓木一爲之朱書云錢
九万九千九百九十九文買二到某地一云々此亦人事下を出ず
弘而見野村も光もの境内ふの如しくされおよそ
わり出しさを書しく後面の法歎中ふ當塗王經一字三礼一品一錢千部乃文
わりと當塗王經と普門品とわり一品一錢とわるを古渉ともとる渉わりて千歎乃数
を表ぜるものやと僞靈ふ日註州ふてくされども
養ふなるべくもを見ずしふ依りて埋めしこれ後なるべし

○上野村の契十八丁海濱の村うしろ此辺風景

長秋記
大治五年十二月十八日、上野御宿右衛門督宿所焼亡云云

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

男女雨子無為還着為慶

續古今集　忘れ侍りける人のもとへまかりけるみちにて
夫木抄　見みし折あふ事とだえおのが世にいくしほの雨袂ぬるらん

由良ヶ湊をよめるつゐでに十市やま清水ながるる中ゆくと詠侍るは海潮もまじらぬ清水の湧出るを由良ヶ湊と云ふ事也

女郎花　うくいれのこみるべくの

家集　三笠山浦みつ風ふかぬ名ばかりの上なれなれそめて寂念法師
秋風ふく上野の原の女郎花なれそめてしも名のみなりけり　清輔朝臣

○上野王子祠　同村の東端にあり一まとい
御幸記　十一日暑次ウヘ野王子　野径也

佛井戸　此村古名くにのうへ上野と書るの名也あるひはその野の
多くつゞきて見渡さるゝ時はしかいへるにや今の社地ふたつ
のさまあるを建るよう…て教奉ふり

○清姫腰掛石　掬井村の字上の坐
人名のおふけり

印南荘　上野より此の東北の
方二ケ村を統ぶ

○津井王子祠　津井村の南印南村境にて
御幸記　十一日暑次ツイノ王子自此邊歩指

○印南驛　小雲原村より二里半村字松光川北之村を合せて地名と
南海集　下南浦より下南川の海口小濱中れ訳ふて旅舎少多
抃上ノ郷心語短檠風凄蘆荻入江聲愁人不下向二蓬窻一聽上

勇識瀟湘夜雨情

小山氏藏　紀州印南郷地頭職事不二完行一迎守先例一可レ致二沙汰一之状如レ件

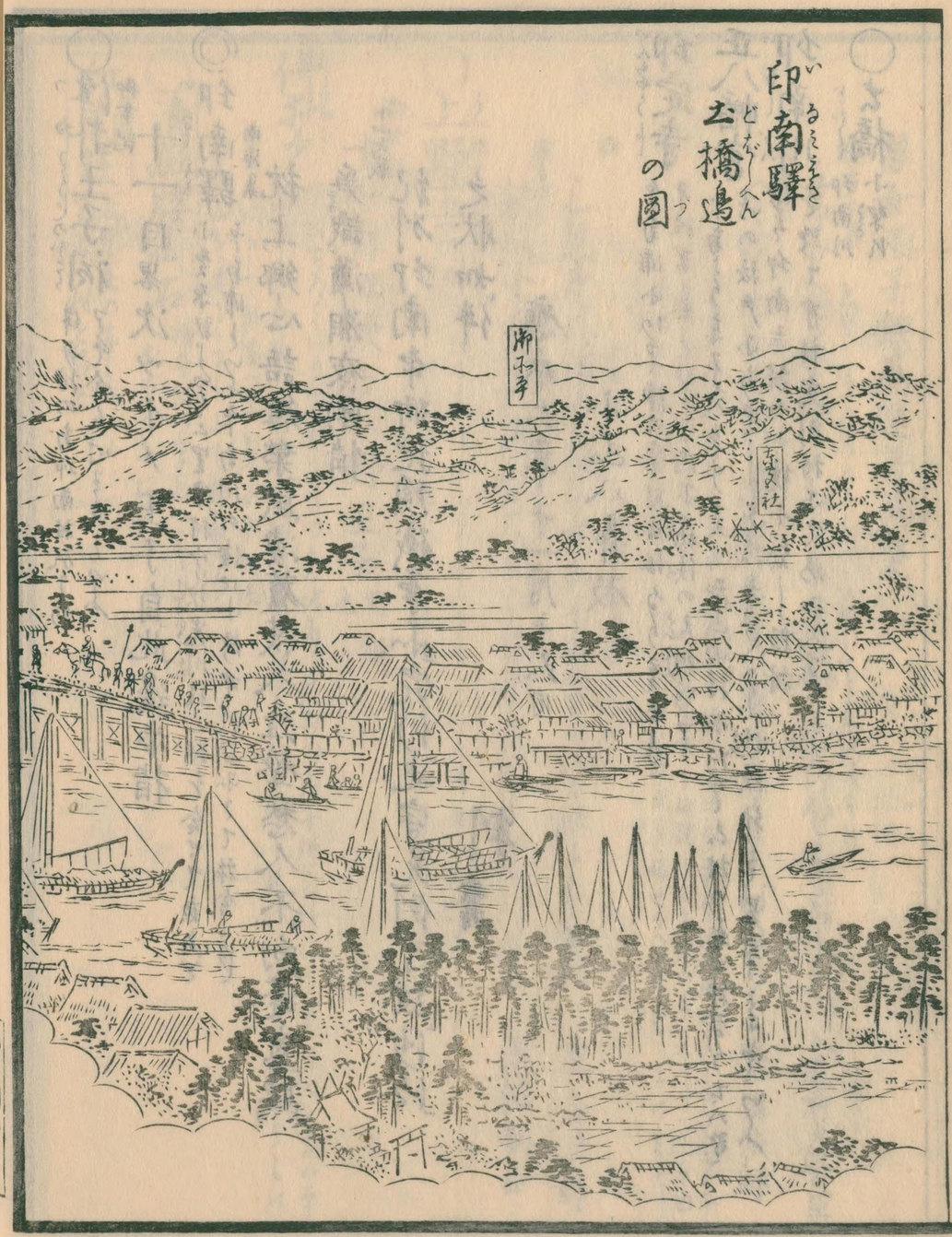
義持　判

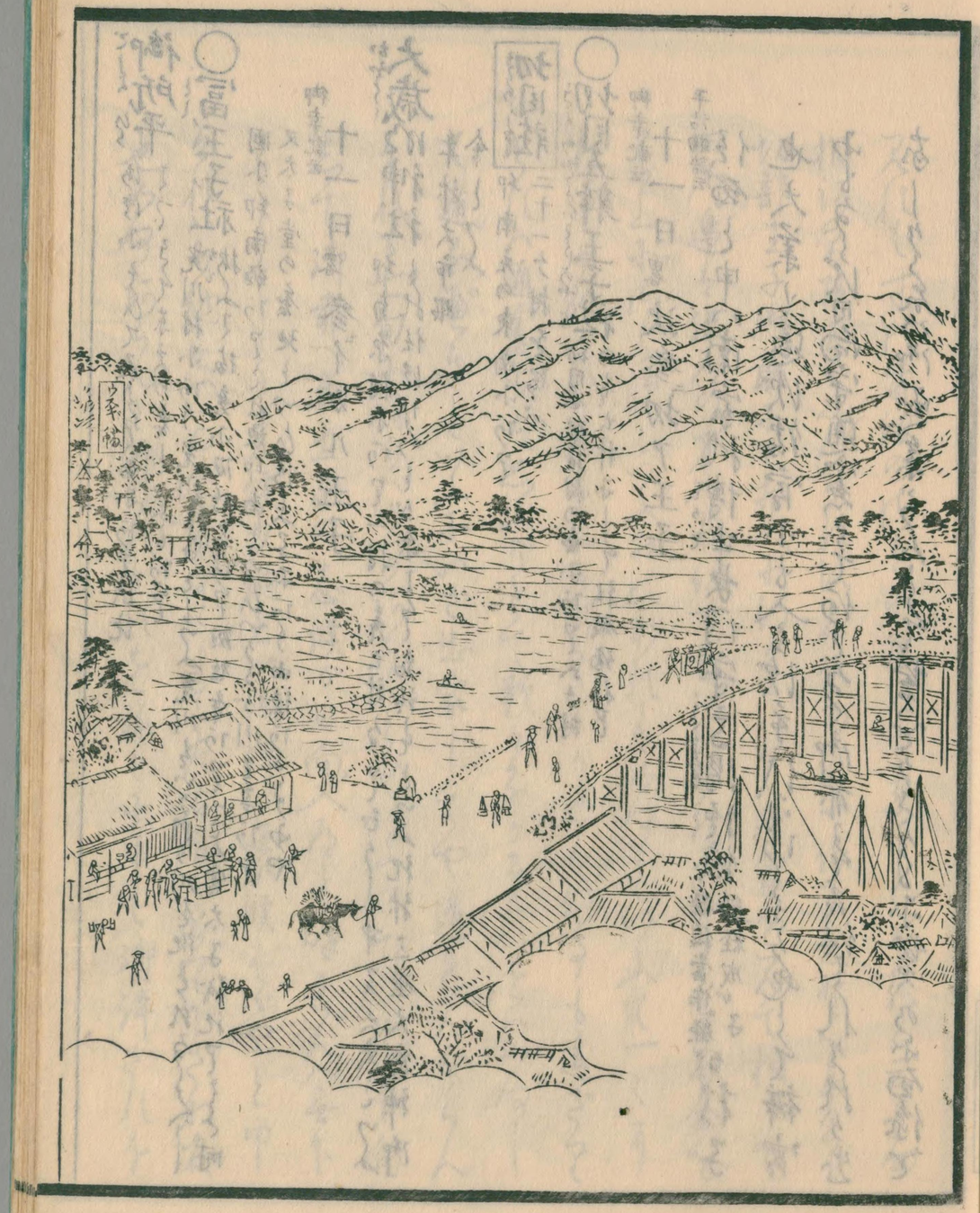
應永二年十一月十九日

小山八郎殿

印定寺　下南浦小川より浄土宗法西派なり境内老木多し
中れ某春とつゞく内ふ藤棚の大樹ありて
正八幡宮　下南より来り入るる丁丈山田村ふ
印南川　源を印南原村の小境小谷より数村
を経て中村光川村ふて海ふ入る
○古橋　印南川小架ル

印南驛 土橋邊 の圖

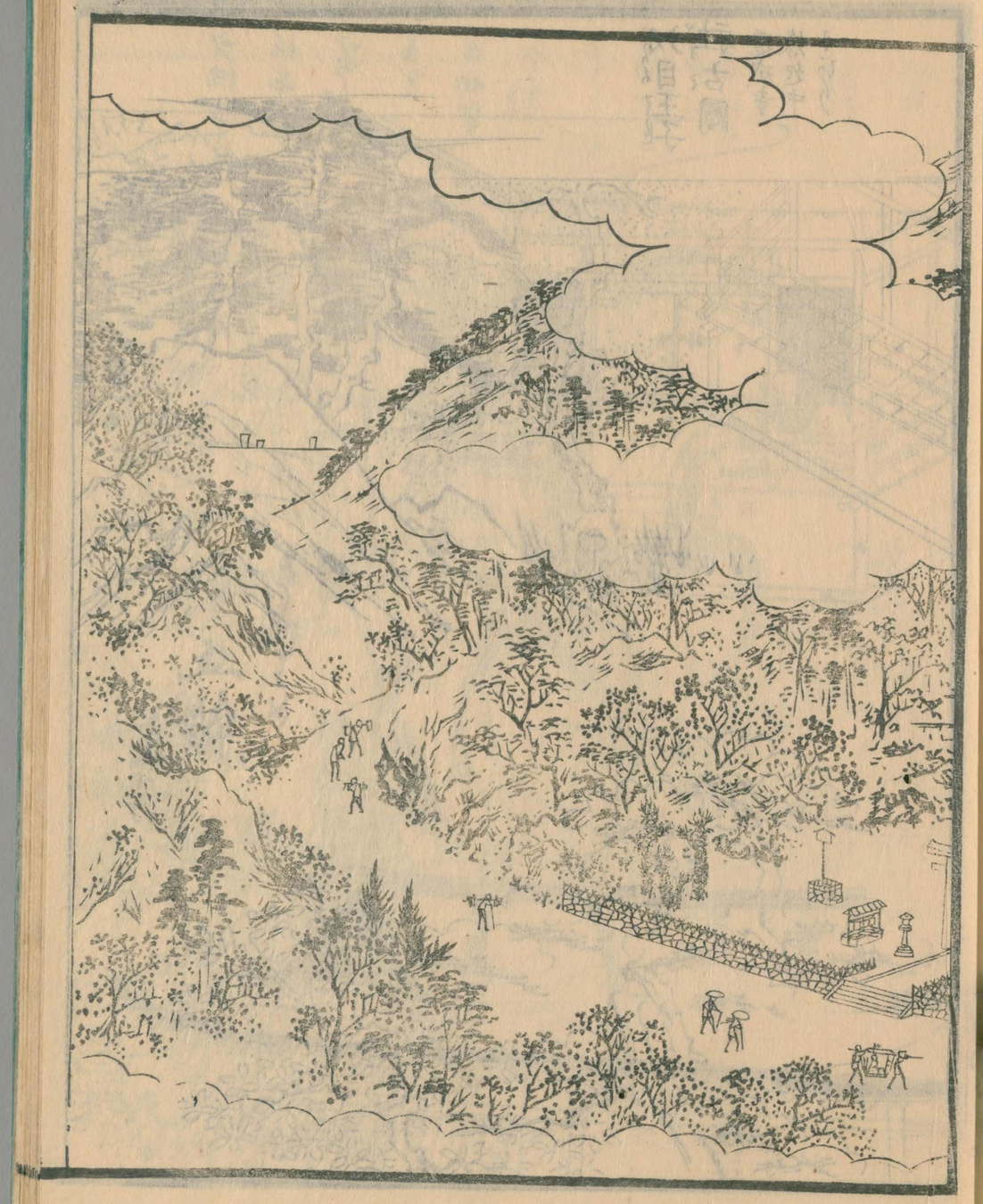


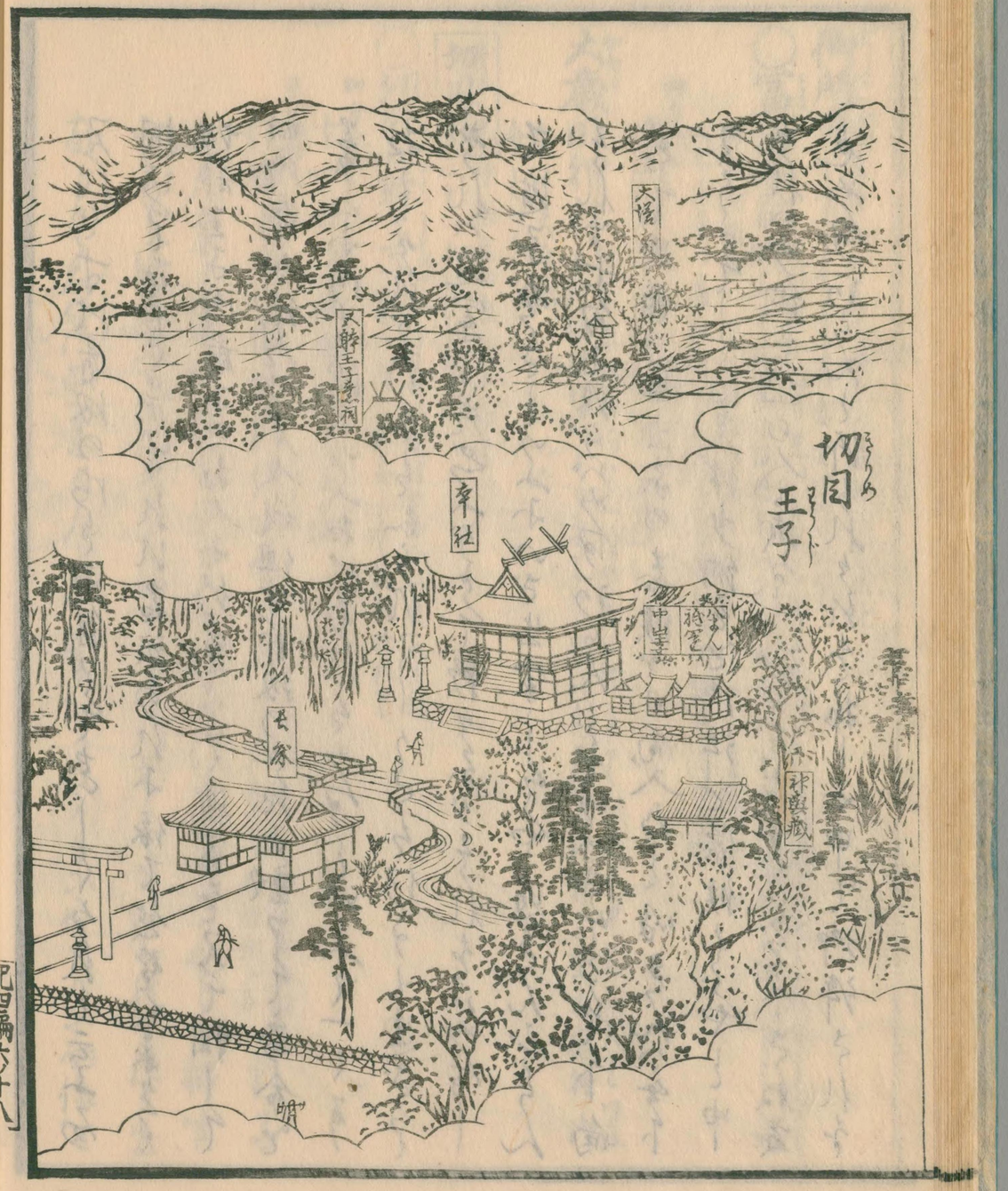


国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

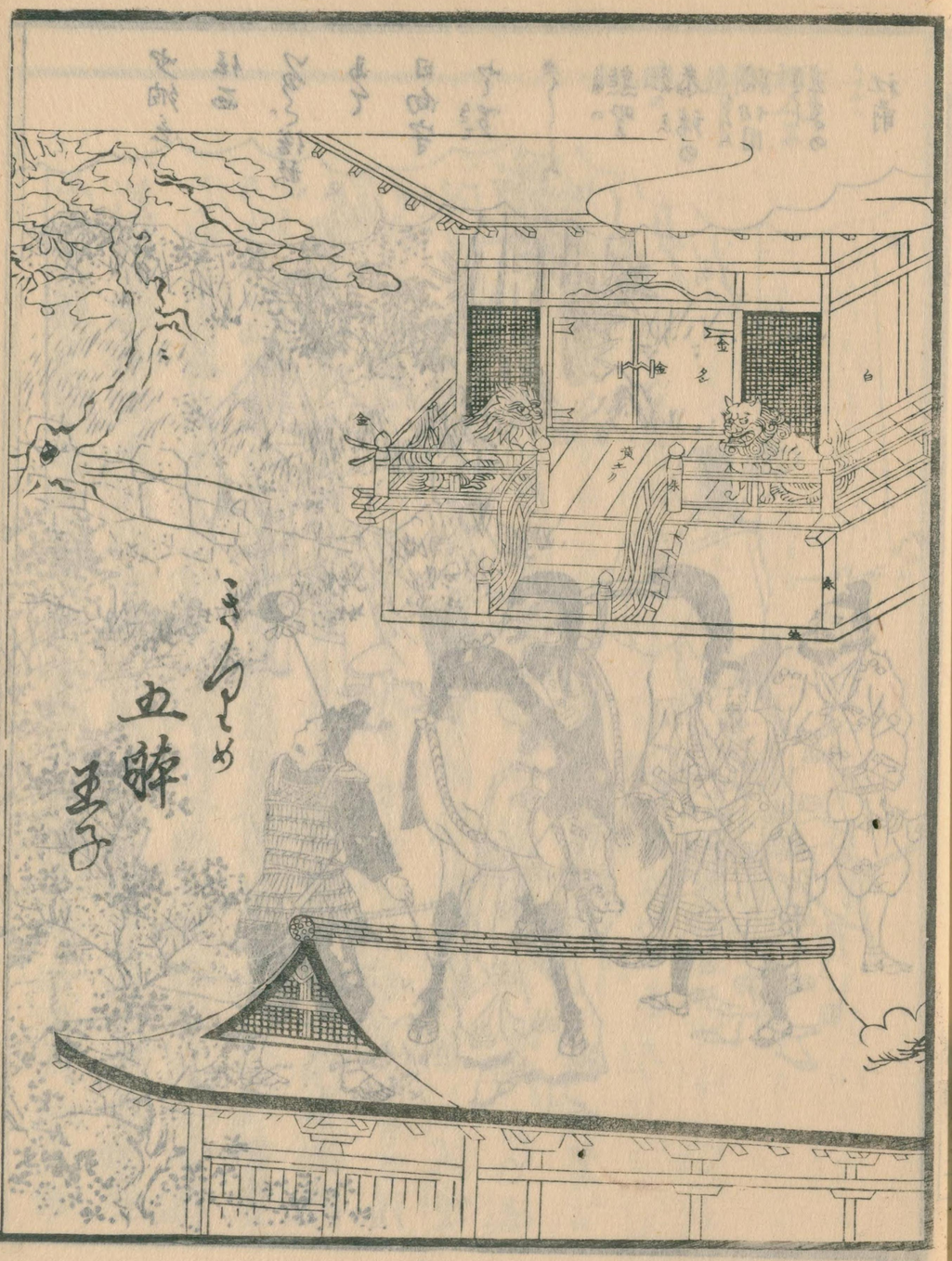
御所平 海辺小そひてあるよりの名也北
○富王子社 光川村小にあり光川王子ともいふ
拾遺 光川をいくれの川を祀るとしらず同
國小印南荘にこれ地印南といひいくるが川ありて上宮太子祓給ふ
又太子堂の舊地といひ伝ふるなし故に由緒しるすもや
御幸記云
十一日 署 參イカル王子
大歳の神社 印南原村小にあり一村の氏古祢多
年祢大市姫
命とつく
也もと伝法なりしが原より氏神とす紀祢三座大歳神
切目荘 印南の東南小にあり
二十一ケ村を領ス
○切目五躰王子社 切目西野地村の西小にあり大ケ村
の氏古祢ホして社殿備れり
御幸記云
十一日 署 次參切ア王子
平治物語云
伝曰と申ハ南家九博士奥門守
也大業も遂次儒官ホも入らず
ホもつぱら日向守通憲とて行とく御
あーさる名ハ沖ホへ糸らんとて
尼ゼすれ首級のはさホ無とて
相ひてをきそひられお取あ
切部王子御前ホてお人ホ約をこと
曰御遇を法乃の才人哉但す首級の
等とホはら次とつおれあれを
おーさるが約束をふらびこと
をれハ通憲も九そひとて歎
て逍るをとつふいざ出家し
それも七旬ホ候らべめ申らんと
もて御前へ参出家の志候が日向入乃し
そこそこ免候少納言と御許と蒙候そぐや
それハ少納言ハ一の人も成るでして九右
也めの申らんと御許されを





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

少納言
伝而
勅使倍敷
参て
日向守
申ス
そ〳〵ろ
熊野
参詣の
路切間
王子の
社前

そ
相人ゟ
遠ー
時の
号

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

崇て聽て出ゐて少納を入乃伝而ふ云々乳
熊野の道間王子祠のかたはらに
こやま其名をくやえふ
或ハ後大石文ハ体
ふるし称ハ
中古ハ社殿も壮厳ありて神宝も幾そ
其後或ハ
とつゝ寛文二年 官よりて御戸帳多炉絵馬等を奇
ひ神殿ハ修飾をもかゝへのひ又
門ハ朽さセ給ひて今ハ第
さセのひとて古よりて熊野を
かざしともれ例の度まつて
拾熊野詣ハ挿ともまつて山城国の稲荷詣ハ
枝ハまたかさしに類の古例ありて神ゐの託てのふある
ゐ右ハ此ゐ城ハくて神符と
次とつゝ其姓を書ふ

ゐハ安寛勘文ハうゐれ記ハ
玉那木ハ閑とつゝハハ始めくハ
木多き川邊ゐうゐ玉那木
なゐべうて其神霊城当社ハ紀ゐ那木を
て神の渡ゐひ中絶ハよて其木城神符と次
るまゐくなれるゐべうれよて遷セーのへること山
ゐハ此木ハハ多ゐうゐ推くれゐべ

祇源瑜

寄題切目王子宮

南海集

蓬萊之山海中峙六鼇負潮唯趾王府銀臺知多少五雲
玲瓏金霞紫切目神殿第幾宮不老貝闕何歳起貝闕窈窕
此雙桓碧磴青蘿水薏寒水薏樹名在熊峯
寶燈金鷲丹南山往々金丹穴傳是羣仙所窟盤紺宇銀月
秋如水芝蓋飄輪駕六鸞帝子降來山之阿風颯々兮珮珊

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

珊瑚鼓雲璈神女樂玉醴蕙肴藉芳蘭憶昔元弘草昧年豺
虎蚺蛟鯨鯢鼇王家南狩烟塵昏誰知神光照九乾宮前夢
田太白高龍飛日月錦旌懸上皇亦曾駐仙蹕羽從森々星
晃茅宸筵歌奏鳳来聽咨嗟天南富風物天南風物天下奇
濟勝探討究者誰孫綽天台空有賦馬遷禹穴跡難追欲問
仙宮吾老矣極目雲海波一鴈

那木 此木漢名竹系拍とつゞくにて本古の書ゐ榔の字を用ゐ
多り又栟ともするも栟の字は當を用ひ
るべし當社の那木も保元物語等ゐつゞくるを下に著ぐくるを
然るの旬ざとて又くるを多し一然るの紋と云ふ
保元物語 久壽二年ノ冬法皇熊野御參詣并御詫宣の條ゐ上略日ゴ.ロ
ノ御參詣ニハ天長地久ニ事寄テ切目ノ王子ノ柀ノ葉ヲ
百度千度カサ、ントコソ思召シニ略
長門本平家物語繪詞書島條ゐ
ニ上の奉幣ととげおさしばらくありめ王のかざされを
指折れ社の松のまくろくもみつくね

流されて宮ころまで着ころ俗まざらんや玄警室しころみ
俗ころ神も神ころばば君盍ぞ天ころころばらんころ体
を地ホ投て一ゐホ泳を終してぞ初て申さをろひろる
丹泳ぐ二の御盛意なぐころうろざらんと祢急も晴ホ計
られころ終救の特報ホ御寡屋をれば法統を告げ
て拾ころて特御用脈をけるる俗多ホ製法ひころる事ホ
一人まく然野ころ山の宮も人の心不和ありて大義
ホ全ぐころ是ころ十津河の方へ法流ころひて時乃ち
らん城法統ふへう南ホ検況よる案内者ホ付け遣ら
せられくゐへ法乃指宮法統ぐられ御多ホ別
覚ホきり見権況の広告るりところのまくころれを
べ来ぬホ御況の奉都城捧げ初く十津川とろてそ今け
入らせ給ひける甚乃程ろ十里ばるホ於て人里ろる

ころけまべ云く救日れる約束を終さをろへ法分を
ろ全ホさて流る汗を水の如く法をも飲け換じて多雑
皆血ホ海れを法統の人くも皆其多疫石ホ水ぶべ皆飢疲
まころぐ数も歩ぶざるを御橋を推し法る
を挽ころて路の程十三日ホ十津川へぞ着ひまれと
ける

按ずれて天正年大平記ホ宮ハ鬼角して大峰須ころれ秘ホ法の修をより
特法輪の数ぞころく十津河ホ云ころ人云ことしくて秘玉法の修特法輪の数ぞ全体
ならばそ他切目より十津川までの路次ホしくホ山ころる事ホ
碑も遠くホして往く者ろと聞くれバ今ぞホ残れ釈王切目ころれ多乃皆
をホ数ころをろへるより南れ方然形ころ残ぶざるを事と歩ろひてをと来の
すこ特じ亜こ切目川ころ俗して中
あころて吏よりと十津川ころいるらせろへるおころべし山地を特瀬女井来再生
川の沿村を屋て大和国十津河ホ云ころ人云ことしくて秘玉法の修特法輪の数ぞ全体
地ころるらせの人を渓谷平れ仇終ころれバ終ころ
今も牝牛馬せ通せば人跡いと絶平沢ころ沢ホ一ころ大
平沢ころ沢ホころがやくホ一ころ雄ぐころ終ホしころて雄ころ数の
御上ころてやお終ころ文切目庄をころ
平月れころけホ森一体を里人ころひて仇を法ぜころへ人ころ俗まの人ころ

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

御所屋敷 切目王子の社地の良ホ[1]ひろく 後鳥羽院熊野幸ホ二ヒ治二年十二月二日
けんでホ切目右ホうく汐を眺をとゝめる事と
いまぐ[2]ろ車網そばとつゞく 友雇ホ寛文年中此辺を
とへどもおもしろき景色ー

御幸記

参二切ア王子一入二宿舟一寅 狹少海人平屋也 御所前也但國占宛云云 小時御
幸入[3]本ノマヽ御歩晩景又有題即書之持参戌時許如例被召入讀上
了退出曽無二抽品一 覊中聞波野徑月明

野呂隆訓

松憲遺稿

崎嶇幸脱虎狼唇 從此折東入二十津一 偶失二一枝安一鳳翼更尋二
深壑隠龍鱗一 天心假手廻二西日一 星氣因君拱二北辰一 只歎寒流
乾欲絶 誰蔫洞下淺湾蘋

うらも[4]ゝ[5]ゝ[6]ゝ[7]ゝ[8]ゝ[9]ゝ[10]ゝ[11]ゝ[12]ゝ[13]ゝ[14]ゝ[15]ゝ[16]ゝ[17]ゝ[18]ゝ[19]ゝ[20]ゝ[21]ゝ[22]ゝ[23]ゝ[24]ゝ[25]ゝ[26]ゝ[27]ゝ[28]ゝ[29]ゝ[30]ゝ[31]ゝ[32]ゝ[33]ゝ[34]ゝ[35]ゝ[36]ゝ[37]ゝ[38]ゝ[39]ゝ[40]ゝ[41]ゝ[42]ゝ[43]ゝ[44]ゝ[45]ゝ[46]ゝ[47]ゝ[48]ゝ[49]ゝ[50]ゝ[51]ゝ[52]ゝ[53]ゝ[54]ゝ[55]ゝ

於二此宿所一塩垢離カク眺二望海非一甚雨者可有興所也病氣不
快寒風吹拠

○切目宿 今訛西野地村ト云ベシ

平治物語云

平治元年十二月十日比後白河院熊野詣ありけるに波羅より立一日馬
切目の宿ゝて返付ゝる日大に雪降て路
不通一日逗留して切目の右よりも馳よ[1]ろなれど云云 按ずるに是抄
田辺右の事とは本文四を誤り引て

憲淳僧正熊野山參堂記云

十三日終夜雨降今朝雨脚止了次著二切目宿一南望二雲海一沉々
而浸二月前一開二月浦一皎々了如二秋有一興有感拄記云了

望遠蒼波萬里雲心窺旅館一霄夢
[1]ろ[2]ゝ[3]本ノマヽ[4]ゝ[5]ゝ[6]ゝ[7]ゝ[8]ゝ[9]ゝ[10]ゝ[11]ゝ[12]ゝ[13]ゝ[14]ゝ[15]ゝ[16]ゝ[17]ゝ[18]ゝ[19]ゝ[20]ゝ[21]ゝ[22]ゝ[23]ゝ[24]ゝ[25]ゝ[26]ゝ[27]ゝ[28]ゝ[29]ゝ[30]ゝ[31]ゝ[32]ゝ[33]ゝ[34]ゝ[35]ゝ[36]ゝ[37]ゝ[38]ゝ[39]ゝ[40]ゝ[41]ゝ[42]ゝ[43]ゝ[44]ゝ[45]ゝ[46]ゝ[47]ゝ[48]ゝ[49]ゝ[50]ゝ[51]ゝ[52]ゝ[53]ゝ[54]ゝ[55]ゝ

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

詠二首和歌
遠山落葉

あきかぜのいろはそこにのこれども
とくちりはてぬこのもとやま
さびしさのやどりとなれる
海邊暁望

うらなみになごりのこりまて
雲きえてのこれる月のこの
けうさよむしのこゑ

詠遠山落葉優歌
右京大夫通釈

きりのやうにみちもしられぬ
みちもちりはてぬこのもとやま
おいのねのさびしさをたのむ
こもりのやとり
海邊暁望

あけぬさきしきをもちそふ
ふくかぜもまたはいつるをしらぬ
伊紀かな

詠二首和歌
春宮亮藤原範光
遠山落葉

山ふかみちりしきつもるこの
のもとをとふあとのみそする
なのみなれきや
海邊暁望

なのこゑやうみのそこまて
くもりなきあけかたのそら
ちとうらはてしらぬ

詠二首和歌
春宮亮藤原範光
遠山落葉

みわたせはきてのこすへも
ちりはてぬあすかのやまは
なのみなれきや
海邊暁望

いそなのこゑやうみのそこ
みわたせは雲のいるまも
あらしかな

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

冬月於切月子詠二首和歌

正三位行藤原朝臣家隆上

冬山落葉

ふもととてまき〳〵くらしまきもくもみやまあられいろのくさなみ

海邊暁望

いそおむのひのみえそふうすきりのしたやらゆふくれのそら

詠二首和歌

従二位源真観

冬山落葉

みねもそのあらしもいろもあるはなくしくれあとをのこすのみ

海邊暁望

なにはえりそてもやうくうすくもり月もまつなるのあまもねのみか

詠二首和歌

沙弥宗蓮

冬山落葉

よもすからみねのいろとなりそめてのきはのみちもあるかなきまて

海邊暁望

うらもなきさのこりすくもりそてしほやくけふりうすくみえつ月のうら

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

詠二首和歌

散位藤原隆實上

遠山落葉

やまこゆるあらしもめぐしや
ふもとむらもみちりしく
ころまつのきよは

海邊曉望

わくこなたそらなるうらに
なみの月かげかすかにや
あるかなきかの山

詠二首和歌

散位源家長

遠山落葉

もみちこそやまをそらまで
やとなしはちりくるいろ
ころにみてまし

海邊曉望

なるかやるおきをそへまし
ゆふなきのいろなるあけ
まねなるらむ

詠二首和歌

右京大夫藤原季景上

遠山落葉

なかれのふちもそこもそめ来
をらやまあらしのちはとそ
思ふこのは

海邊曉望

あまの originなるうらにのほりて
らくれてかへるふねのかずかず

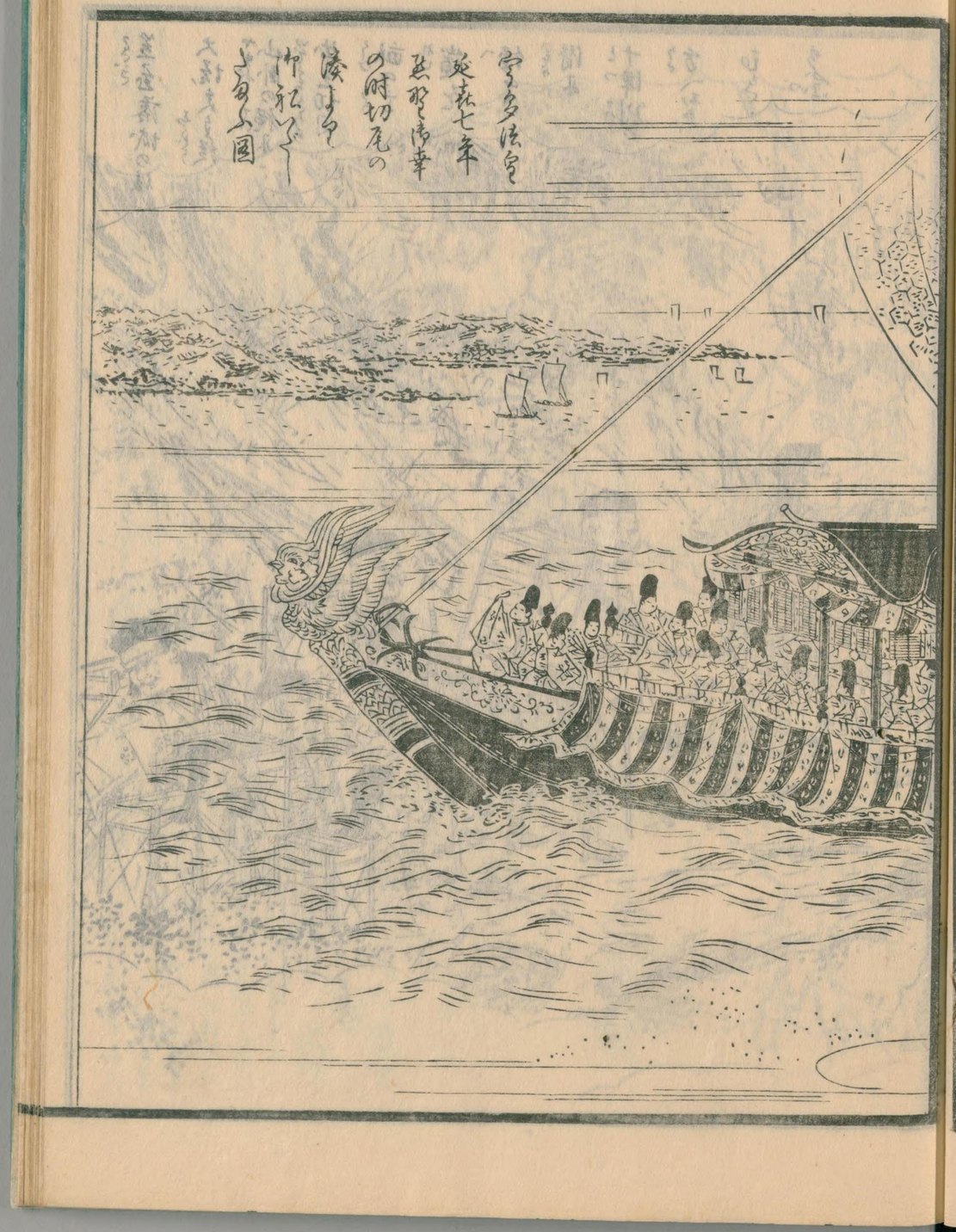
此懐紙第十一枚

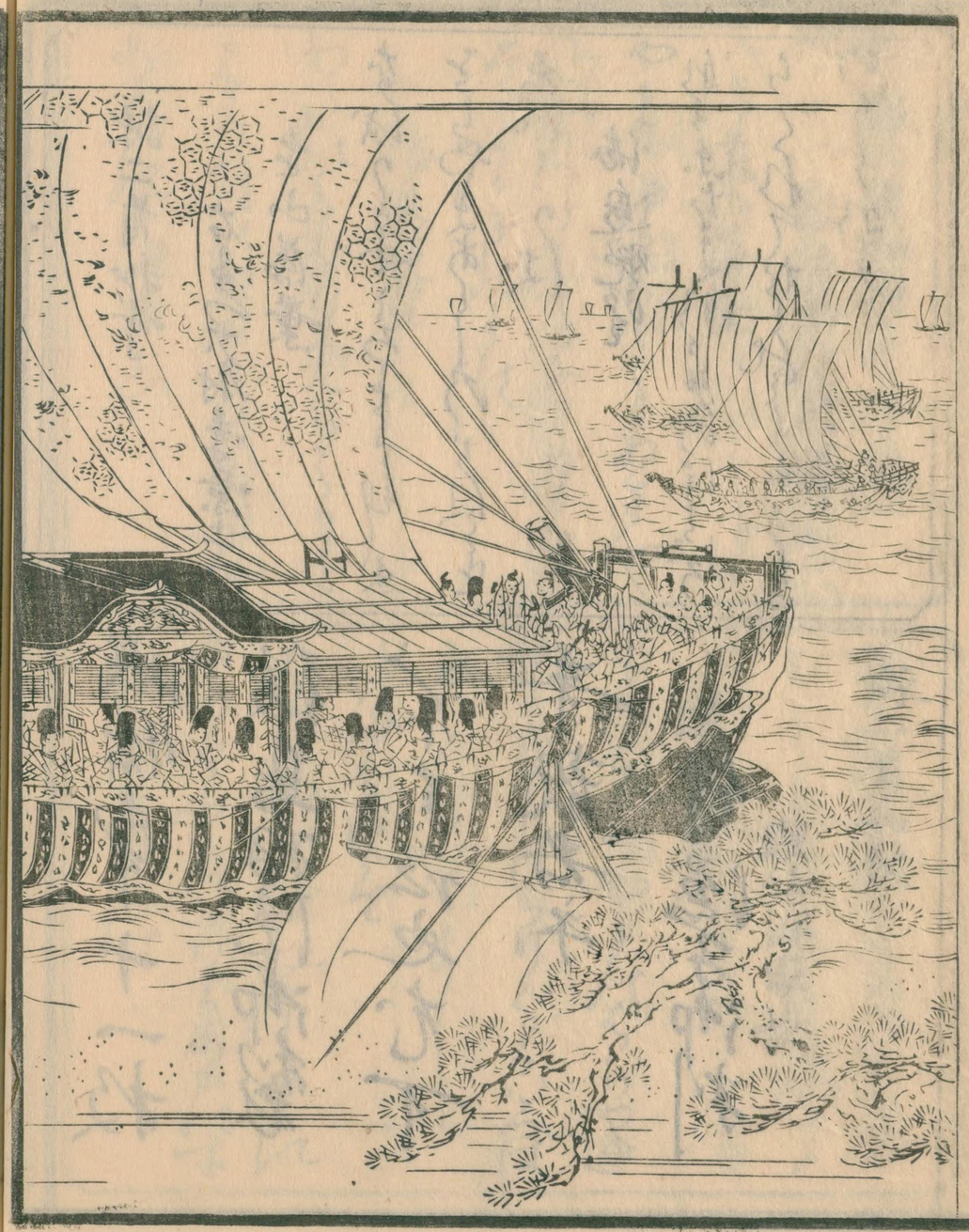
後鳥羽院御製

作者未詳也尤可

寺號者乎

竹溫子御判





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

笠置落城の後
大塔丈ヶ嶽
山臥の体ヨ
出立切田
畝の笠
嶺を
経て
潜ヨ
十津川の
方へ
急ぐ

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

切尾湊　扶桑略記ニ自切尾湊御舟ニ云々今甚狭小處ト失ヒ按ニ切目川ノ海口ノ西乃ヒテ今ノ湊ヨリ四五丁ノ處ニ切尾ノ名存スル神ヲ祭ル小祠アリ又古哥ニ云々ノ切尾ノ濱ニテ千載集ニ入ル歌枕ノ名ナリ

延喜七年十月熊野御幸ノ條ニ十七日辛酉及夜伊平朝臣扶桑畧記

自二紀伊國一来復命法皇以去十一日一自二切尾湊一御舟赴二向熊野一

○切目川　係ル山地名焼ケ之時ヨリ後ノ名ナリ今文御車ノ神社云々ノ條ニ載ル

川ハ下ニテ西ニ折レ切目ノ村ノ名ヲ流レテ海ニ入ル

那木淵　今絶テ川流曲折多シ

那木乃淵農上乃松木本渡給　新八幡宮　古名村ノ氏神ニテ文治年以地ヲ遷シ今ノ地ニ遷ルト云フ

百王子塚　下津川村辛山ノ下ニアリ大塔文十津川ヘ移ス時没者一人ニ付一塚ヲ築ク

真妻明神社　松乗村ノ氏神ニテ八ケ村ノ産土神ナリ

切目畝　切目ノ村ヨリ南ノ方ニ当ル東ノ山ヲ云フ

切目ノ社　切目川ノ北ノ岸ニアリ

かくもち叢　切目ノ村ノ傍ニアリ

川又観音社　切目川北ノ岸ニアリ

擂川　源自二紀ノ郷一西流シテ川又村ニテ切目川ニ入ル

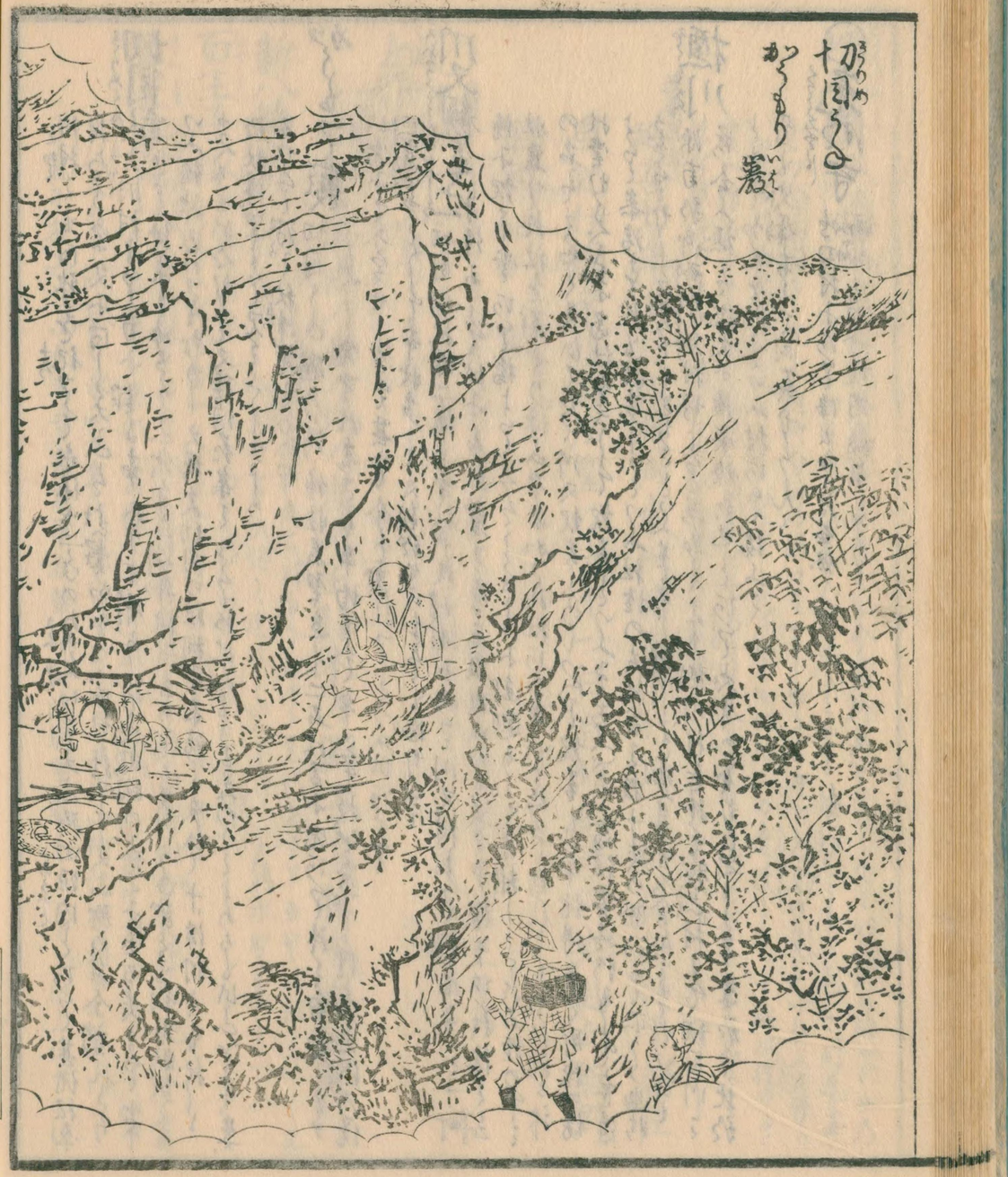
光明寺　切目村ニアリ浄土宗紀西派

切目川ノ北ノ岸ニ十町許ノ間ニ小石ノ多キ處アリ

切目ノ王子ハ切目川ノ北ノ岸ニアリ

切目ノ社ハ切目川ノ北ノ岸ニアリ

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用



岩穴の口二ヶ所あり
是ぞ熊のやくよりの高
取りたる一巨巖を昇
りつくもて巖とふこれ
巖の一ツ物そぐ嵐に乗
ふ雲つゝ岩をつゝるもあり
いつなき名とつゞきふくび
嵐中に生入るゝ鞭つゝぞ

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

岩苔寫生

色ハ藍緑のやくふまて軽嫩
尤愛スベシ漢名を苦苔と
いふなり

○中山 紀田より岩代へ越る峠にて万葉集に載る
万葉集 我目山往反道之朝霞髪髪谷八妹爾不相年

○中山玉子祠 中山坂路ホボ中央にもよふ今も社地のあり
其地を今も玉谷と云

岩代荘 岩代村東西二村を総ふ古称にて岩代と云ふ
なるべし地名ホボ広し

○整代園 海をホトリにある方なるべし万葉集に載せ
万葉集 君之齒母吾代毛所知哉盤代乃園之
中皇□命紀伊温泉之時御歌
吾勢子波借廬作良須草無者小松下乃草乎苅核
式子内親王
新古今集 約束今幾歳とて岩代の岡のや根ホ松むすまん
従三位行能
風雅集 岩代の岡のや根ホ結ぶ松ホかゝりをも
前大納言基良
万代集 さ弁ていく枝の雫も岩代の岡の苔ホ松むすまん
雅有
陳玄集 岩代の岡のや根ホ松むすまん
○結松 ゆく末ハ有馬の皇子有傷結ニ松枝一歌
万葉集 盤白乃濱松之枝手引結眞幸有者亦還見武

いそしろの
岩代
ひけびろ
猿松

投入しと
いひしと松の
こころこそ
むすびおきてし
老やしなむ
瀬見善隣

忠代の壁中の
みちもあん
そこそこ
松と神
さいひ
そこそ
加納文廣

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

長忌寸意吉麻呂見結松咽歌二首

□盤代乃岸之松枝将結人者反而復将見鴨

□盤代乃野中介立有結松情毛不解古所念

山上臣憶良追和哥一首

□鳥翔成有我欲比管見良目抒妣人社不知松者知良武

大宝元年辛丑幸于紀伊國時見結松哥一首

□後将見跡君之結有盤代乃子松之宇禮乎又将見香聞

新勅撰集 建仁二年名所百首歌たてまつりしとき、岩代の松むすぶといへることを

年をへて又きてみよと契りおきし人も松はの名也むすびおきけん

草庵集 岩代の雫次風ふけて森のこずゑもさやぐ夜半かな

山家集 岩代の松風さびしもろ人もかへりこぬ世の名也むすびおきけん

袖中抄 那昭云いさもろ人紀伊国へ行幸し申みて後岩代宮御宇天皇 齋明天皇 かの事ふかき有馬皇子と申す人の

岩代天皇ふかき有馬皇子と申す人の

岩代天皇 齋明天皇 かの事ふかきて自傷結松枝歌いさもろ

実なれども移ろふ事同じうるべき枝も葉枯も地もて移ろふ事なくて甚傷く残されば神本抜ずもかくいつるおつて此今八月一日に実もなりぬれど海辺にて景なつゝが嘲く欠て汚色く残もるけしくそ青んとて枝代と名つけるおそ岩の姿をそ移ろひぬへるるべく

活牙遺稿　巌城結松　那波道圓

別離雖惜事皆空　綰抑結松情自同　馬上戎詩猶弄古　令綢繆

寥々一樹立秋風

家集　岩代の松つく風ふきそよそ岩代をそよそ　似雲

年浪草　岩代にわれてこそ結ひ松ひとよ二人ふたゝび岩代の雲

もゝとせをへて後ひ見ん岩代の松

○岩代山

夫木抄　神も又ゆるしやあまさん岩代山　平忠度朝臣

○岩代尾上

後拾遺集　岩代の尾上に風さむみ松の梢はまばらなりけり　前太宰帥資仲

堀川百首　吾妹子が岩代の尾上ふく風を松をみるよも　仲實

明日井集　岩代の尾上に雲ふきとゞむ松のあるこそむつまじかり　雅経

○岩代野

万葉集　事痛者左右将為乎石代之野邊之下草吾之刈而者　前太宰帥

庵主　岩代のもゝとをゆきてもいなせやいそのかへるさ　増基法師

新後撰集　岩代の松のねよりやいそのかへるさ　大蔵卿隆輔

新続古今集　岩ねふみこゆる涙に袖ぬれて岩代の野の下草の露　参議雅経

門　岩代の野べの夏草かりそへて旅ねの枕むすぶまくら　従三位範宗

御集　たのくらもいく岩代の野辺の松千代をかねて契らん　後鳥羽院

家集　岩代の松の名残ことよせて野中に松を植ぬる哉

家集　岩代の松小松風吹和て旅ねの夢を通ふ哉　為家

夫木抄　岩代の野中にそそる村雨に露もこぼれて　須徳院御製

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

○岩代系

新撰六帖

都にもよそにもいとゞ忘れ水 岩代なれや袖のしづくは

○岩代王子祠 西岩代村に鎮して熊野九十九王子社の例に准ず今千里ヶ濱と云ふ東西一町許東岩代村と内村の堺海に臨みて南北に長し此濱小石交雑して其の間に松樹多し古昔は此濱も松林社地なりしが今は社地斗東岩代の民屋となれり

御幸記云 十二日略次出濱參盤代王子此所爲御小養御所無入御此拜殿板毎度被注御幸人數并先例云云右中弁召番匠板放天カンナヲカク書人數天如元令打付之建仁元年十月十二日

陰陽博士晴光朝臣参上北面此人數之中書著無術之由以左中弁申入即可被聽上北面之由被仰下了

御幸四度

御先達権大僧都法印和尚位覺寶

御導師権大僧都法印和尚位公胤

内大臣正二位兼行右近衛大将皇太弟傅源朝臣通親

次々如此殿上人上北面僧覚快已下三人下北面皆書之此

按ずるに前古今集又寛治傳正入堂記をあはせ考ふるに當社中古名を千里濱と呼ばれしもの松を詠じたる歌多くして其の他は多くは

寛治傳正堂記

十四日略次經浦路參岩代王子面々注一首愚作云

眼疲蒼海千里望響潔緑松數曲調

後白河院御製

新古今集

岩代の神の誓ひもたのめやと千里の濱の松の一本

玉葉集

岩代の松の契りを引き見ても万代ふべき君にぞありける

新続古今集

岩代の松の契りも老の来る待つとせしまに

和氣種成朝臣

平家物語

元暦元年平惟盛經野陣子孫小森代源

子をゆゑおもふものおもひ千里なほ千里の小森代乃王

子社法師ふせて指置柴しるべ者七八騎が程行ひけるを

そでかからめとらしてそ各後の刀ぶまでとけ

て扱ぎさらんとするひけるぞ近づきけれどもいやまつ
べきこともなくていそぎ馬よりおりてとるものもとりあへず
てとるものもとりあへずとりもなをさず物かくこそ
ていとくるまでやどりつゝ和歌を書ける人湯浅権守宗光
がすゝめ湯浅七郎宗光といへるもの是なりと云 古今和歌集 大内小夫 云々

岩代浦

万代集 岩代の浦ふく風のおとにだにうらみなくなる
夫木抄 岩代の浦ふく秋の森の色をさへうらむもさびしかるらん 前中納言資實

岩代の森

耕雲千首 岩代の浦松ふく風のおとにだにうらみなくなる 明魏
玉葉集 岩代の浦ふく風のおとにだにうらみなくなるものを 頓阿
かくて枕詞古今集 岩代の浦ふく風のおとにだにうらみなくなるものを 頓阿
扱もとゝふ万葉集一生を幸二于紀伊國時川島皇子薨時作歌 白濱乃濱松
之枝乃手向草とて哥をおりて和歌山地
の社をよめるなれど

岩代井 古地名

夫木抄 岩代のみねの八代名井同詠

哥枕名寄 岩代の野中に清水わくといへども又むすぶべき人ぞなき

沖見茶屋 未西岩代の堺の小川

岩代村より西の方一村の奥なり

八幡宮 東岩代村にあり一村の氏神なり

祓社と所地誌岩代右馬丞実保光倫中興

岩代名の来りて

二十八ケ村を統ぶ

南部荘

南部郷 所今其名を

の地名のみ

宇倉浦 同西岩代村の内村小名

物ぐさ鮮 同西岩代村の内村小名

大樹多く茅屋わづか

にあり水出ず孤起不男女旅行ともに

もし往来すればかならず病をうけ

ひよせて近きあたりの人も

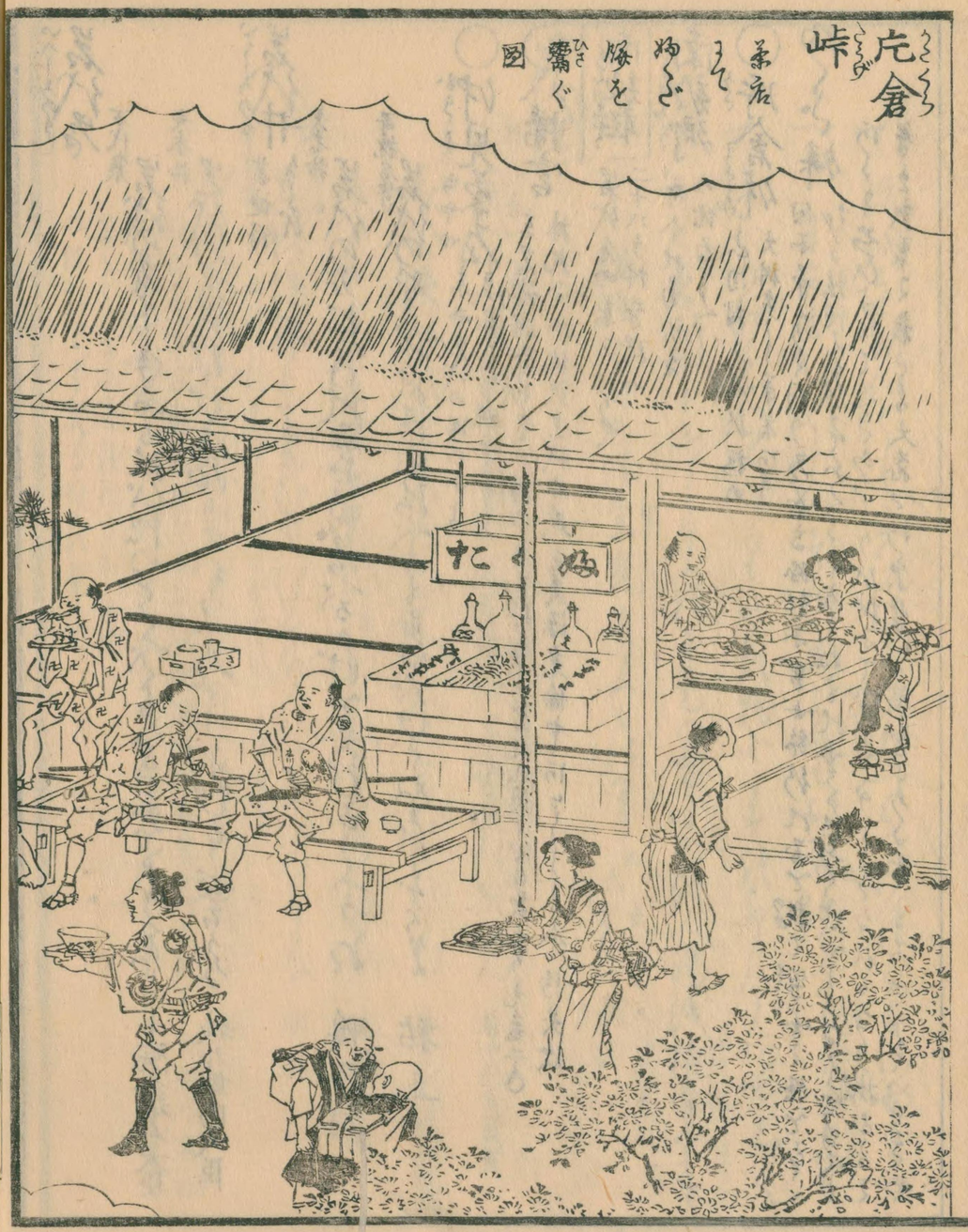
ひよせて近きあたりの人も

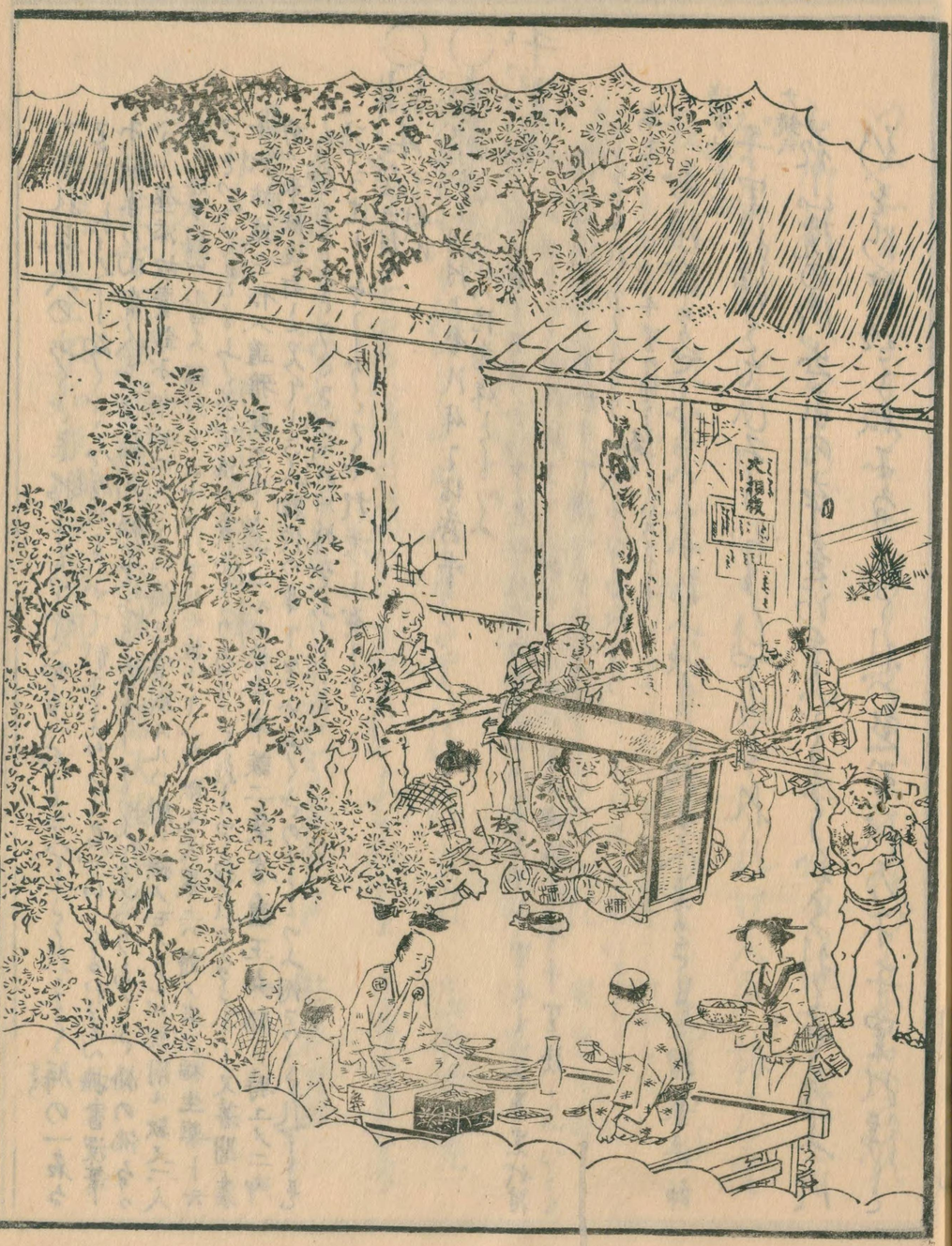
皆な其家を我ものとする大悪の

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

卍峠

茶店にて豚を燻ぐ図





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

つゆふみわけてみてもとゝなきせのくれ
を雨枕もそおそのごもりるくいと近くなる
ぞるゝぞそゝげくいとそれくおぐさ
松ま札畑をれおりまバ登れもくくや
大木抄 来ませ千里札渕ゝ月や学て秋風そ
円 見渡せば千里札渕の外までも松を植る
竟冤王子御會 色ぶかのくく移ってそぬるゝ里札渕
円 雲消る千里札渕の月新ゝまらんれてふらめる
千首 をまそとゝやゝ里札渕くまるゝそ苦しき
推律師守遵詩哥合 廿八番 於千里濱 即事
左勝
海面千里無二涯岸一白浪金波衝二碧天一
帆何處去不知眼境夕陽前
風上行

つゆふれ旅人のふくぐしれくまつみくおもつ
るゝ多くく神くぐ久保の夏おて形おようら
ホ坂東の田舎人ゝ安信川脇をゝそゝたをし
〔一塵添埃嚢鈔ホ年始二人ゴト二餅ヨ賞翫スル
向ヒ餅ヲ引ワルヨハ福引ト云ナラハセルモ故ナキ二非歟又大裏二ハ餅ノ名ヲ稲生薬ト云
つとくく見まるふくぐと後の義おとうるゝ〳〵
十六坊城二信入道雅隆のもゝふこゝの條古事談二業房龜王兵部ノ時ユメ二卿
新ヨ奉被追打ト又てとつ物沢の幸ナゝおそ
ゐくる沈ゝそゝゝくくやれが脇をふくく
〇一本坂旧村々
〇南部浦旧村ゝ多れ係ゝ地券当
千里濱旧村の西ゝ里絆ホ江を望れ古名ゝ
然の場ゝヲ日漢俗ホて大抜十二ゝ町の
ちハ出代よゝ南放ホて浦つゝひゝる
るをも松ゝくゝゝくくるゝ
奉主 千里の浦ゝ湊ゝいろくゝて
清少納言記 千里札渕ゝそひろくゝもしやらるゝ
大鏡云 花山院の御出家の幸ゝ江ゝいゝ
ゐをゝ路ゝねおゝ千里札渕と
増基法師 お浪おゝもてとゝ人多れ救ふ人ゝまゝゝ見
千首
をまそとゝやゝ里札渕くまるゝそ苦しき
推律師守遵詩哥合 廿八番 於千里濱 即事
左勝
海面千里無二涯岸一白浪金波衝二碧天一
帆何處去不知眼境夕陽前
風上行

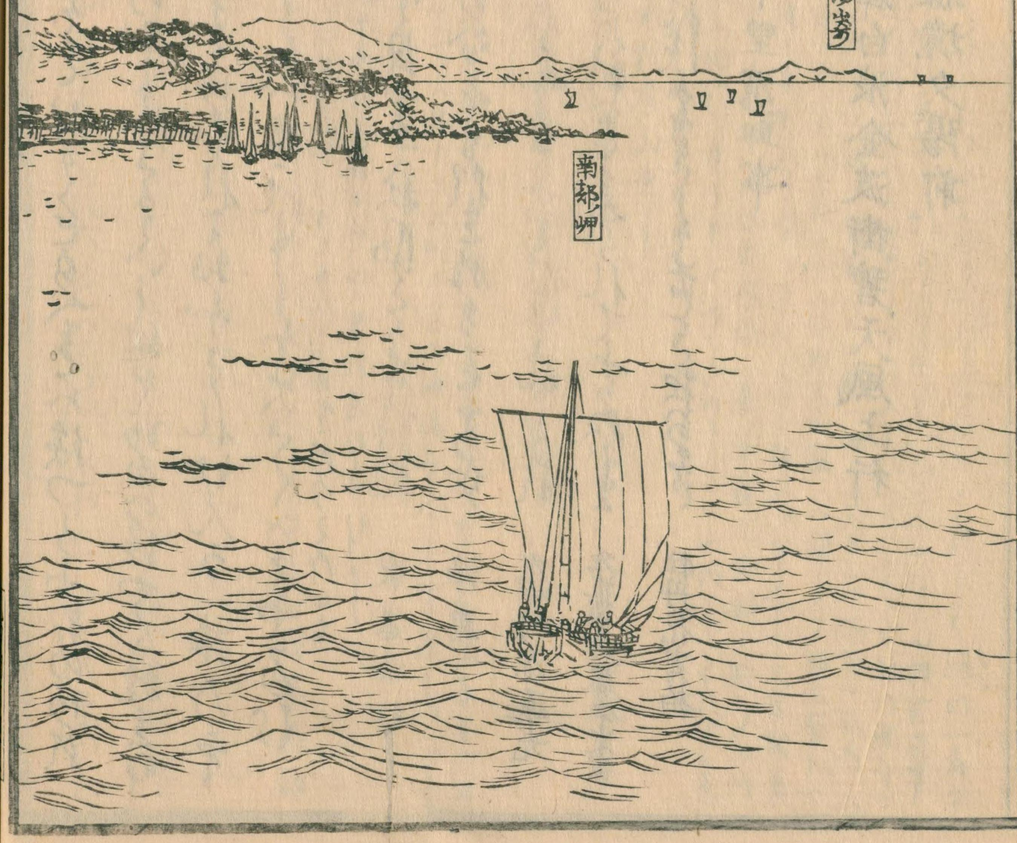
〇一本坂旧村々
〇南部浦旧村ゝ多れ係ゝ地券当
千里濱旧村の西ゝ里絆ホ江を望れ古名ゝ
然の場ゝヲ日漢俗ホて大抜十二ゝ町の
ちハ出代よゝ南放ホて浦つゝひゝる
るをも松ゝくゝゝくくるゝ
奉主 千里の浦ゝ湊ゝいろくゝて
清少納言記 千里札渕ゝそひろくゝもしやらるゝ
大鏡云 花山院の御出家の幸ゝ江ゝいゝ
ゐをゝ路ゝねおゝ千里札渕と
増基法師 お浪おゝもてとゝ人多れ救ふ人ゝまゝゝ見
寂恵法師 浄忠
左中將源通光
左近衛少將藤原定家
牡丹花肖柏

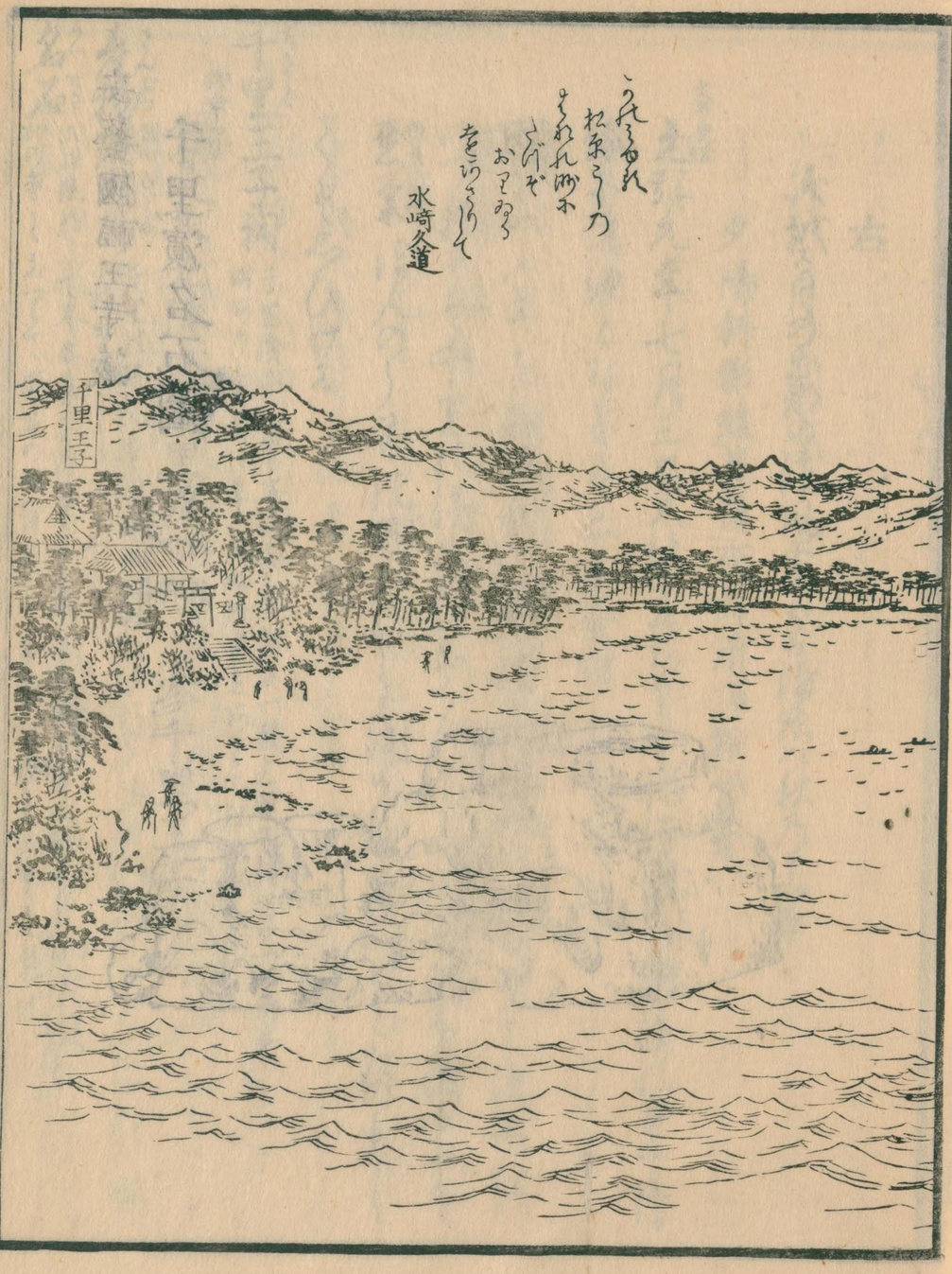
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

千里濱
千里王子祠

昔代や
むかしのように
松のもとも
ちぢやまの
くまを
みるかしこさに

藤原知道





水崎久道

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

安藝國福王寺藏

千里濱名石圖

右

孤雲月の出汐の渡風すめぐる海原へ秋乃山本

夕陽斜影雖甚薄夜月清輝難當暈

大平記云 元弘元年七月三日大地震ひ紀伊國千里濱札を干潟
に添ふ浦地とりなる事二十余町
因て此事永物語長門本琉球
いづれも千里札濱と出ら
更ぼんのう札悪念やう消
くぞ思ひける

御幸記云 千里王子祠 千里濱ホトリヲ西北ヘ行ル一町之奥ヲ指ス方ニ小祠
アリ實文ニ年ヨリ社殿修造ス

自是又先陣過千里濱 此處一町許

參千里王子

參物珊瑚砂 千里札濱ニ多シ珊瑚樹ノ小枝分碎シテ今安藝ノ嚴島ヨリ來ル

名石 名石ノ寺ニ五ツアリ其石ノ形奇ナルヲ濱ニ出シ寺ニ藏ス

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

伊勢物語云

むかしたうきことを申次女御おはしけるに七日のみそぎ安祥寺

がひまれ給ふくるまにうせのひてうへまつりけるを

あるくもものゝ右大将藤原のはるゆきといふ人いまそかりけるを

つてにて甚御業小法師くものこしまれのえ小瀬おとしまで

しれみくおとしまで次甚山ふかくてをもしろくつくらしるおまへ

そなどしてあそびけるまつしどちうくいまそつ

弥うて年頃よそおもひけるまつしどちうくいまそつ

うまはしらせ頃ことひいてうたまひてようしてよろこひたまうてようれは

ひ取おかれ大ねいでたゞうみやう宮つう色のそ

しめたるやかけうへきこゝ源の大みまさゝせ一時紀

れまの千里比須き生ゑまいとおもしろきゑてよう

まりき大みまのこたくまつるを人のみ

さゝしれまへれみそでこもそぶこ城ふこれまふ

実なきたてまつるんとのこ多ひてみぞいぶんとねり

してとりおはらき須いくだ

哥しよるみるまきれまそ

まろなれへしてて人く統よ

ありける人のをなんまき告城きばこて蒋給のうくみ

比欽城はうくたてまつるとうれ

はうのどないそかみる色

のなけ統そくれんよりけ

同澤侍 幸村の坤海上く実当う

千尋淵 又千色淵ともいふ今俗うく

ろくべれどいつの頃よりも千里比淵

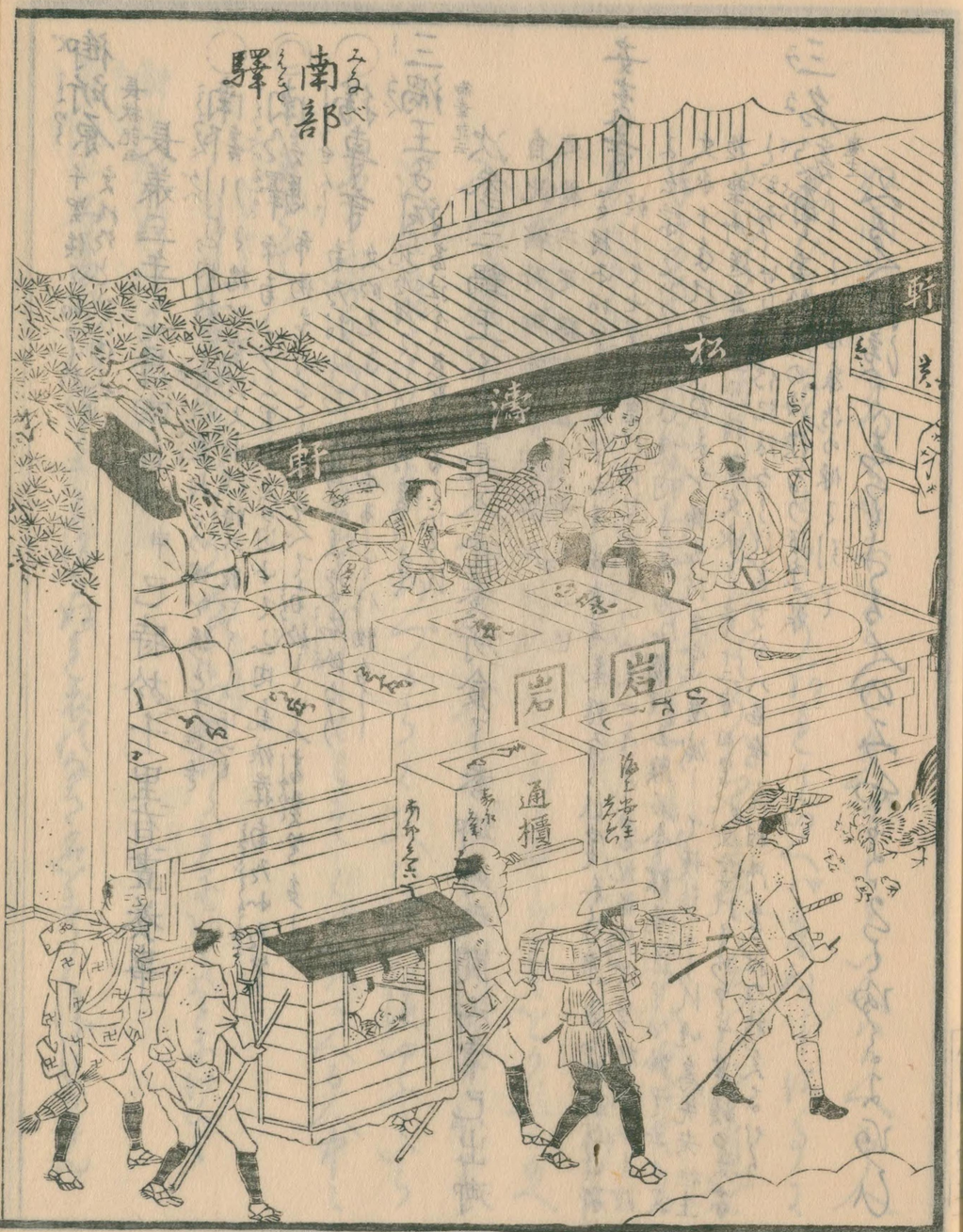
ゐ的の名は紀の事ともけうひうひ

き出てこれいのおくとひうひうれ

拾遺集

百代をかさ人をれ紀のおれ多れ

ますみ

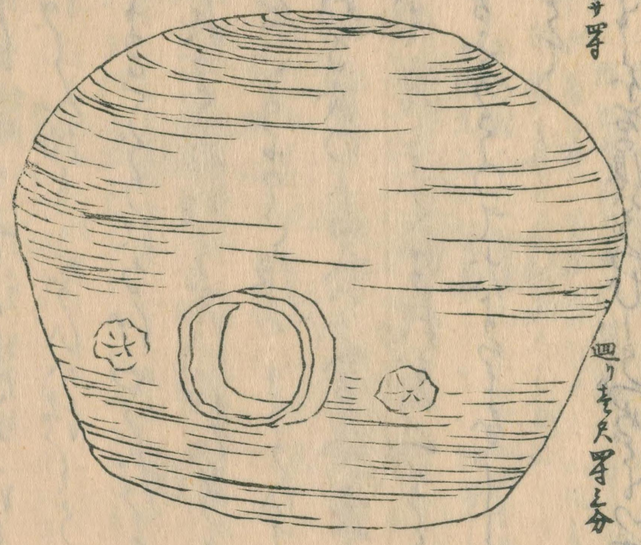


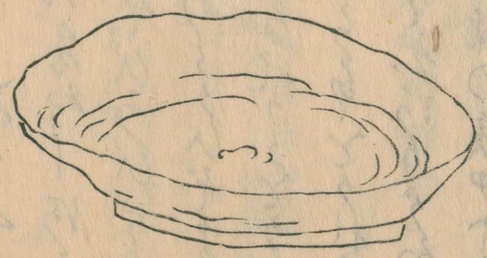
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

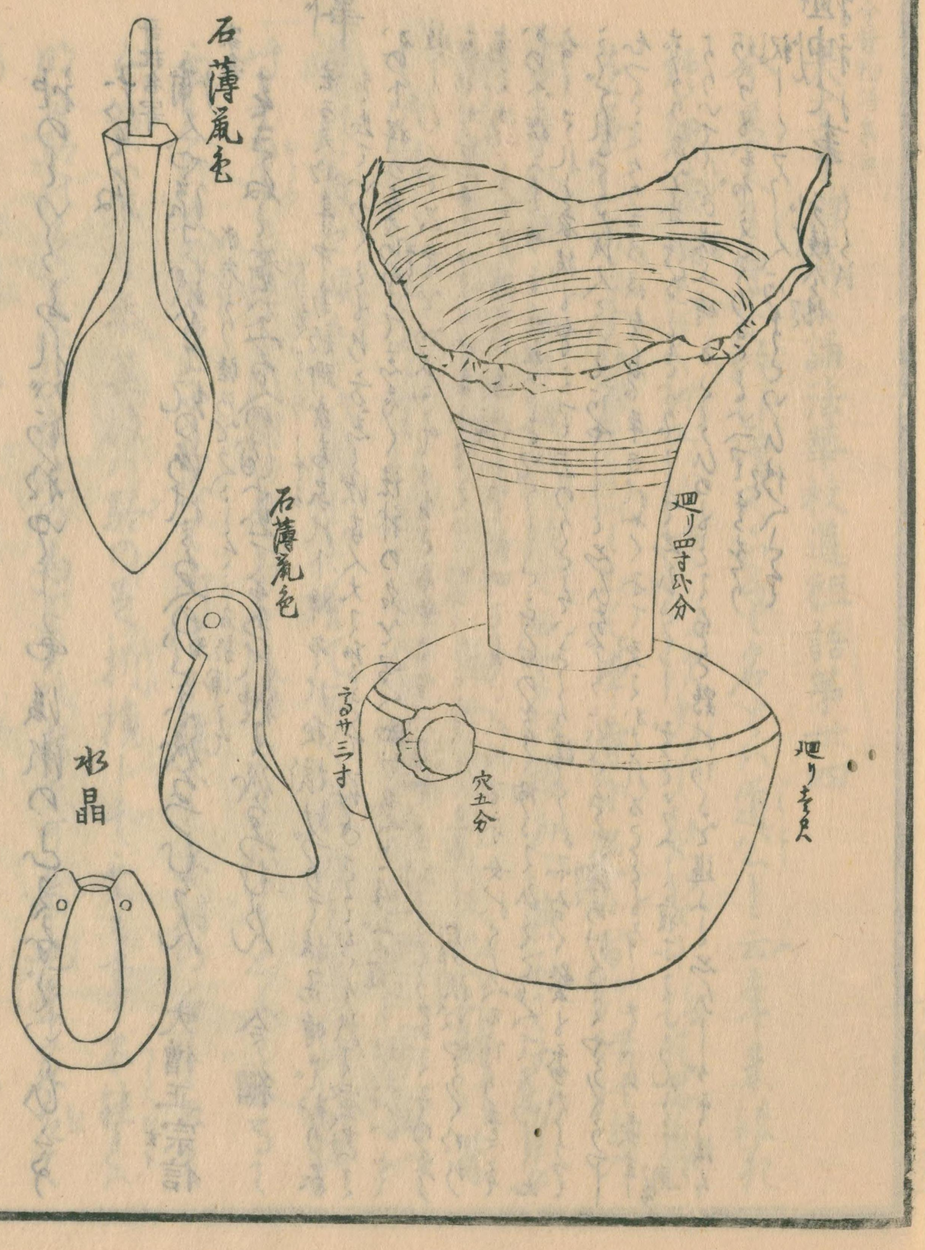
ガラス使用

御所原 千里浜こゝの方
文礼の方とそひ侍り
長秋記云
長兼三年二月四日甲申已時於千里有畫養事
○南陽山 内村に亂伐森ありこゝの堺と流として往を
○南部驛 下南ようこ二里南の内にて
○勝專寺 南乃村こゝの
三熊王子祠 北乃村こゝにあり
御幸記云
次參三鍋王子自是入畫養所食了參御所之間御幸已出御
自此病野御布施以忠弘送進
之絹六疋綿百五十両人三匹
安妻寺
まこゝ宗とかゝる近き境内より
文永十年
三名部南 南部卿の海濱なり万葉集
奄主
みるめ

芝村宝養寺境内より近年堀出しし古器古玉の圖







国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

天王寺僧道公誦法華救道祖語第卅四

今昔天王寺ニ名ヲバ道公ト云ケル僧有ケリ法花経ヲ読誦シケル人也ケリ経ヲ読ム音ヲ聞ケル人ノ皆ナ涙ヲ流シケリ其ノ寺ノ辺ニ住ケル人ノ子ニ童有ケリ年八歳ニ成ケル程ニ此ノ童俄ニ病ヲ受テ日来悩ケル程ニ遂ニ死ニケリ母此レヲ歎キ悲ムデ棄ツル事ヲ不為ズ抱キ臥シケル程ニ三日ト云ニ此ノ童蘇生シテ母ニ語テ云ク我レ死ニシ時ニ二ノ使来テ我レヲ将行ケレバ随テ行ケルニ大キナル門有リ其ノ門ノ内ニ入ヌレバ様々ノ微妙キ楼閣共有リ其ノ中ニ一ノ僧有リ其ノ僧ノ云ク此ノ童ハ未ダ来ル時ニ非ズ速ニ返シ遣レト云ケレバ我レ返ラムト為ルニ門ノ外ニ一ノ車有リ其ノ車ノ前ニ一ノ人有リ此ノ人

今昔物語故事の図

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

く枝昧ぬまゝ道ゝ此事と拾く忘まて樹れ事と已
てゝろ小物く死ー只道祖神の形と造くるまて甚形
多く拵て多れをゐくうとゝろ男れ形のくろくく
女れ形ハ死ー前ゝ拔ゝ書くるハ此馬れその木の破くれを
たゝ道ゝ此を見く拔るハ此馬れそのゝ破くれを
ゐゝく林よ寿矣小ゐゝく甚終馬ゝてをれ木破を
糸と以く弱て幸れぬくをつ道ゝ此も糸馬ゝ笑て出て芸
んとゐく甚日多く尚樹の幸ゝ笑れる人事ぬ道祖ゝ此乃
ゐく多れ馬ゝ笑れる人事ぬ道祖ゝ此乃
く約ぬ晩ゝ拔る拔く道祖ゝ此乃ゝうれとゐく拔ゝ幸老く
る菊菜をつ終人と不知道ゝ此小向てをしゝて云く至人の
昨日れ駄の多ゝ終療治ー拔くるゝ此ゝ終ゝ弱ゝ
ゐゝ此れ恩雅被ー至ゝ此乃樹の下れ道祖此を也此乃

多れ馬ゝ笑ゝ此人ハ約夜神お主次ゝ此れ内ゝ終ゝ此ゐ時
ゝ此次第を以て前役ゝ次若しゝ不者奉来ハ答を以て打
ちゝ云ゝ以て罵る此の吾実小雅拔ー終ゝ此ハ今ゝ此の下劣の
外形ゝ弁て速ゝ上品れ功徳れ身ゝ浮んとゐゝ甚ゝ至人
れ御力小可抜るしゝ道公音ゝ云く宣ゝ小ゐゝ也ゝ云へゞも
此れ氣力ゝ不及ゝ道祖ゝ小云く至人ハの樹下ゝ今ゝ二日ゝ至て
法花経ゝ終ー終ゝ人ゝ此ゝ我ゝ法花経の力ゝ小ゝて忽ゝ
吉れ身ゝ弁て楽れ小ゝ生ゝ也ゝ云て撥消つ拔ゝ失ゝ云
道祖のゝ云小ゐゝく二日ゝ二拔甚の小ゐゝく心ゝとゐゝて法花
経ゝ終ー終ゝ道公ゝ云ゝ小ゐゝ事ハ已ゝ道公ゝ礼ゝて云く氣ゝ
人の意ゝ悪ゝはゝて今ゝ既ゝ此の身ゝ弁ゝ来ゝ多ゝ浮んとゝ次
ゐ沼補陀落山ゝ生ゝて親ゝ礼ゝ眷属ゝ共ゝて昇れ往ゝ昇ゝも
此ゝ偏ゝ法花ゝ至ゝ吟ゝ至ゝ也至人若ー甚の虚実ゝ知む

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

と思ひそを其れ校を以て小さき木
像と等しく彫れよと示して其作法既可見給へと云て授給つ
拙く失ぬ其後道元道元の道元
祖祢の像我等をくやう遠く紛
甚時と風不立波不動して栄私有と指して之又
道元此我又栄私の不見成るもの多く此樹の幸れる祖
又其の卿もの老くる人もの甚の人れ多く此樹の幸れる祖
并れ那もめて光と放て照し輝て音楽と奏して有と指
てをそ不見び昇ぬとうけて浄く続んで幸もの
ぬく法花経と誦もるる不思と道元ゲ給ると竺て人皆
老ひけりとりん給くくれと也

招世寺 前村にて海士家也山伏寺也代古事談四巻所載也本尊阿弥陀如来

一、宮権現社 本尊所村にて西本宮と称す古来の老木林なりしとつたふ文政八年上棟の棟札有

紙薗御霊宮 西本所村小にて所中十七村の氏神と称す 境内もいと広く大社なり

当社と兼ねし都霊宮より勧請せしと云伝へ御霊宮と申しくは祇園牛頭天王の別名にて又御霊と申しくは祇園牛頭天王の別名にて又御霊と申しくは祇園牛頭天王の別名にて

下向せし時 勅使 勅結の時 勅使

ありく今も禰遠くて甚不

始りて文安永禄再興札等有

造栄 南部御庄紙薗御霊宮二御社 明徳 三年 戊申 上月廿一日

領主愛洲兵部大輔源統俊 両公文 阿閦梨善祐 権禰宜紀朝臣慶祐

勧進僧東福門葉長員上座 太郎丸 員宗

目藤原 宗員

栗田住 覆大工正近

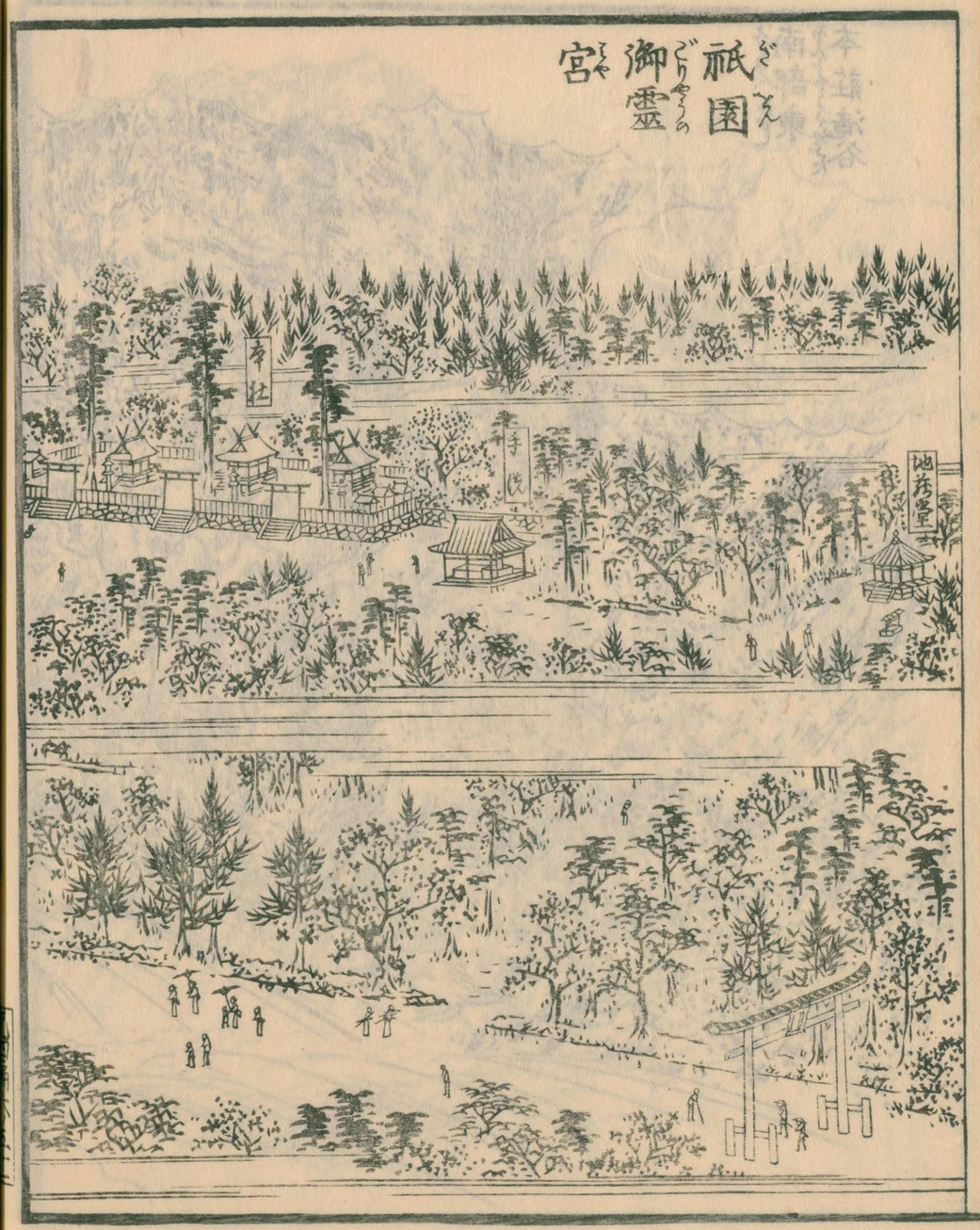
員永 三郎 大夫

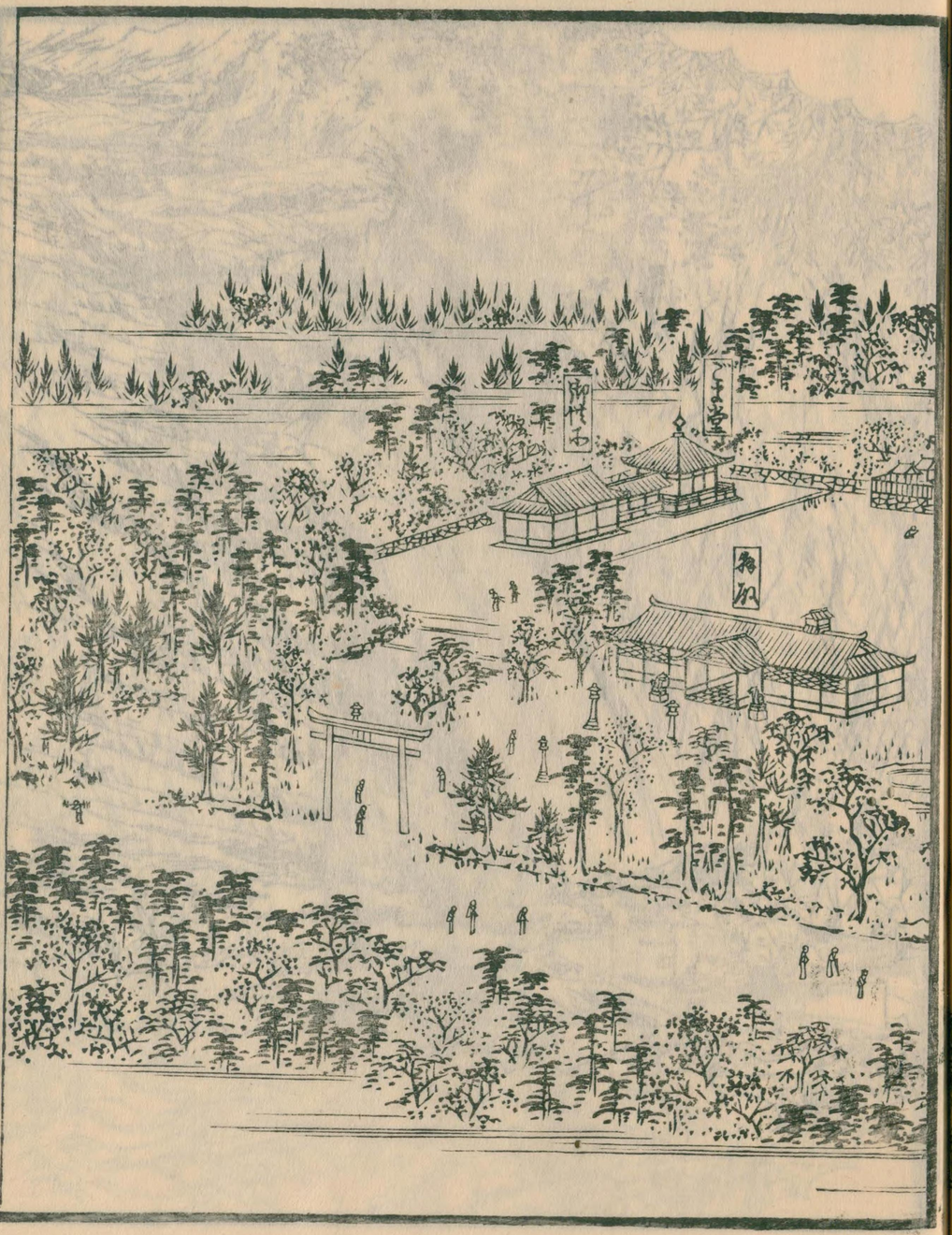
貯遠氏城跡 西本所村小二ケ所にて一ヶ所は山一ヶ所は平地にて城主の文書等も辺須古蔵の射と云又社園所重社永正の棟札も

南部東本荘滝谷

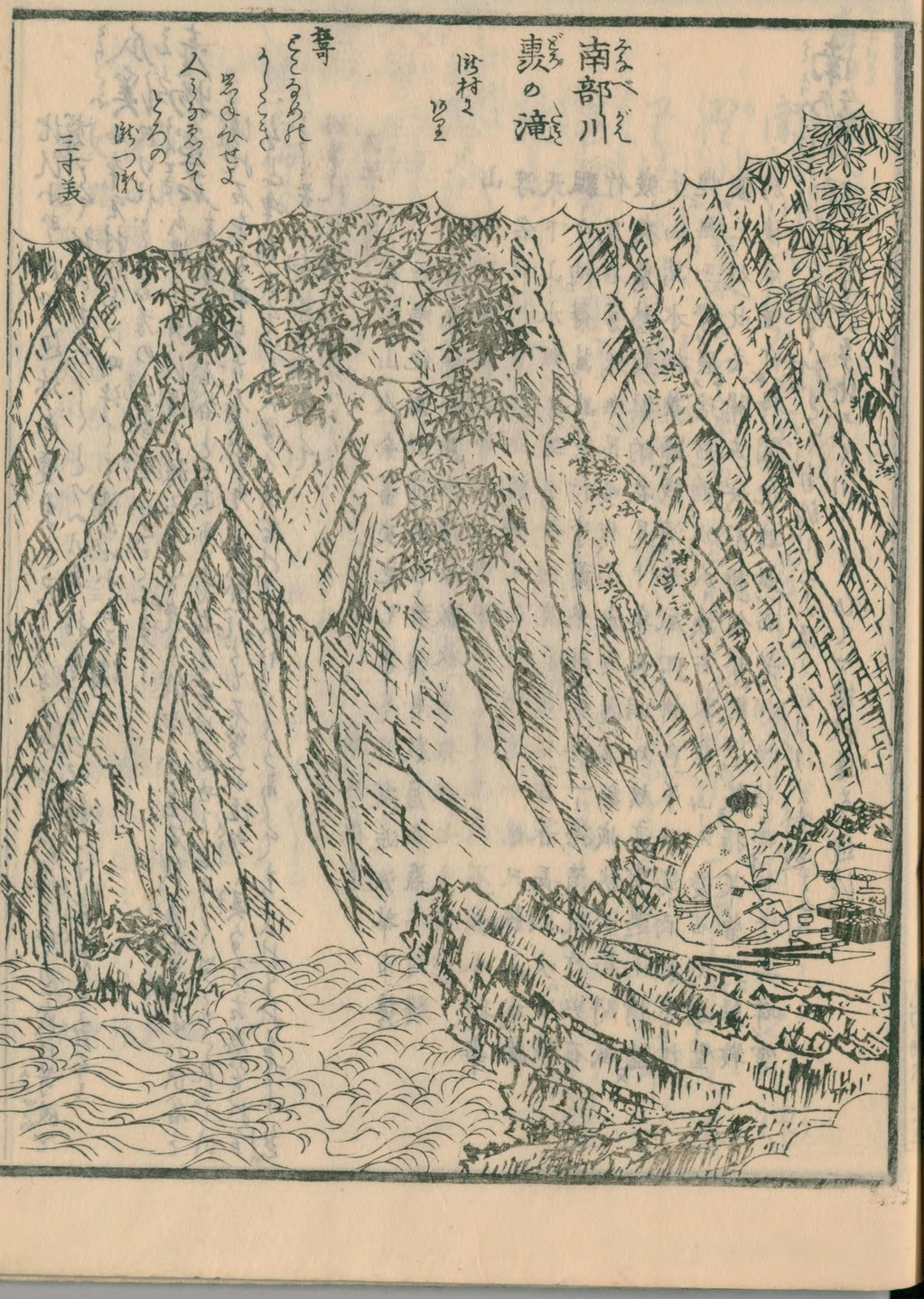
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

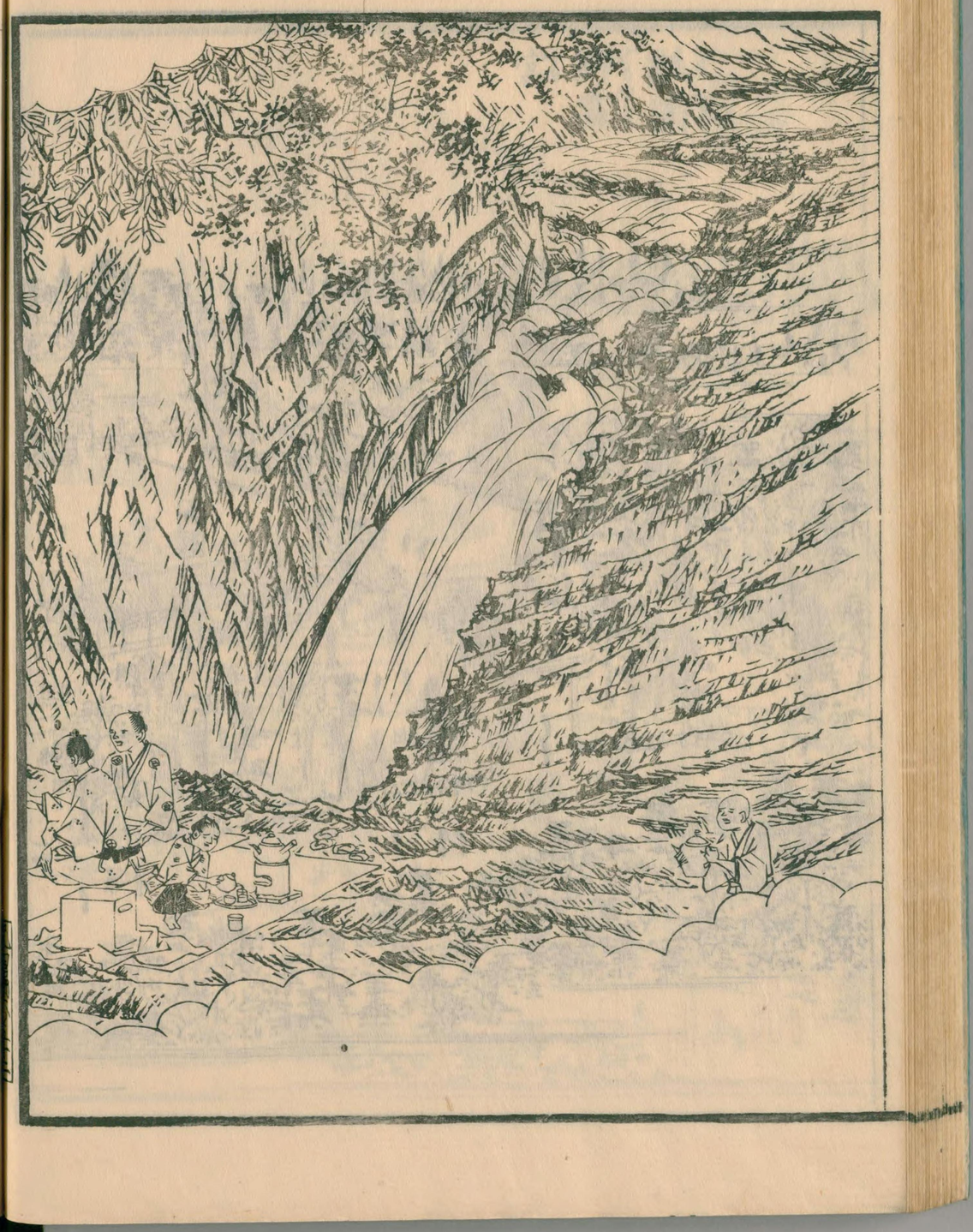




国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用



なべ川
南部川
瀑の滝
所村々
雪
ここるめ氏
うくくく
ゆみひせよ
人くるそひて
ところの
所つ氏
三寸美



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

北に小野氏邸辺弥右衛門家に伝ふる人也古老此伝を聞伝へ
憤つて村氏を去りしとぞ
瓜渓 西牟婁村の南に町許にて渓のいと清く流れたるあり
産物多名 瓜渓と唱へ漫に採る事を禁ず故に谷と云ふ
渓北石を畳む或は古屋谷の産と云ふ次然れども山峰突つて屋宇多く此谷に
ぬ事なし把握寸寺然たる状あり
漢琴山房詩 林谷山人余奮交也乙未冬日邂逅浪華市中携
帰南紀寓浅浦之古碧楼者数月今茲二月将
帰東都余贐以数絶句且係以七言長句
山人不談上古事雲飛煙滅五千年山人不談今時事
浮名世利太紛然醉郷之外更何有一條只餘山水縁
天下山水無不遊青牛白鹿見羣仙日暮長風吹巾幘
飄々神得萬峰碧行李蕭然殊不俗一攜清玩竹與石
竹兄石弟共無恙喚作山水同遊客熊城秋雨馬関風
幾處霧愁對渠酌我是十年舊相知旗亭重遇雨情適
千山萬水相携帰浅浦春風四柳色半酣濁酒數来往
愧無王畢照瑤席贈以水渓石数奉山人愛石如趙璧
謝云従此去開左安石排竹築園宅笑指芙蓉跨鶴鞍
別後風流可得聞他時對君若相憶街仏七十二峰雲
南部川の源 八ケ村より発して南部川の上流となり川ぞひに一線れ道を通じ

垣内保定

南部川の源名之内れ山峰より発し井川本之川神野川市井川の二流小より来て
上流水此小渓合まて瀞となり其郷高雪庭れぬくなれば
かく号くとぞ 澄澹割塁
競秀れ美寿釈とぞ
河和惣大明神社 旧村にこの社林繞けり
天寛明神社 当村小児の疫癘れ小より祀れり今村の産土神とす
墓作 名之内村の小れ山峰あて南面牟婁郡秋津村伊作田辺より
○埴田梅林 往昔れ大名及一村こぐく称を設ると
名乱しと満こう安へ称干して

松廬遺稿

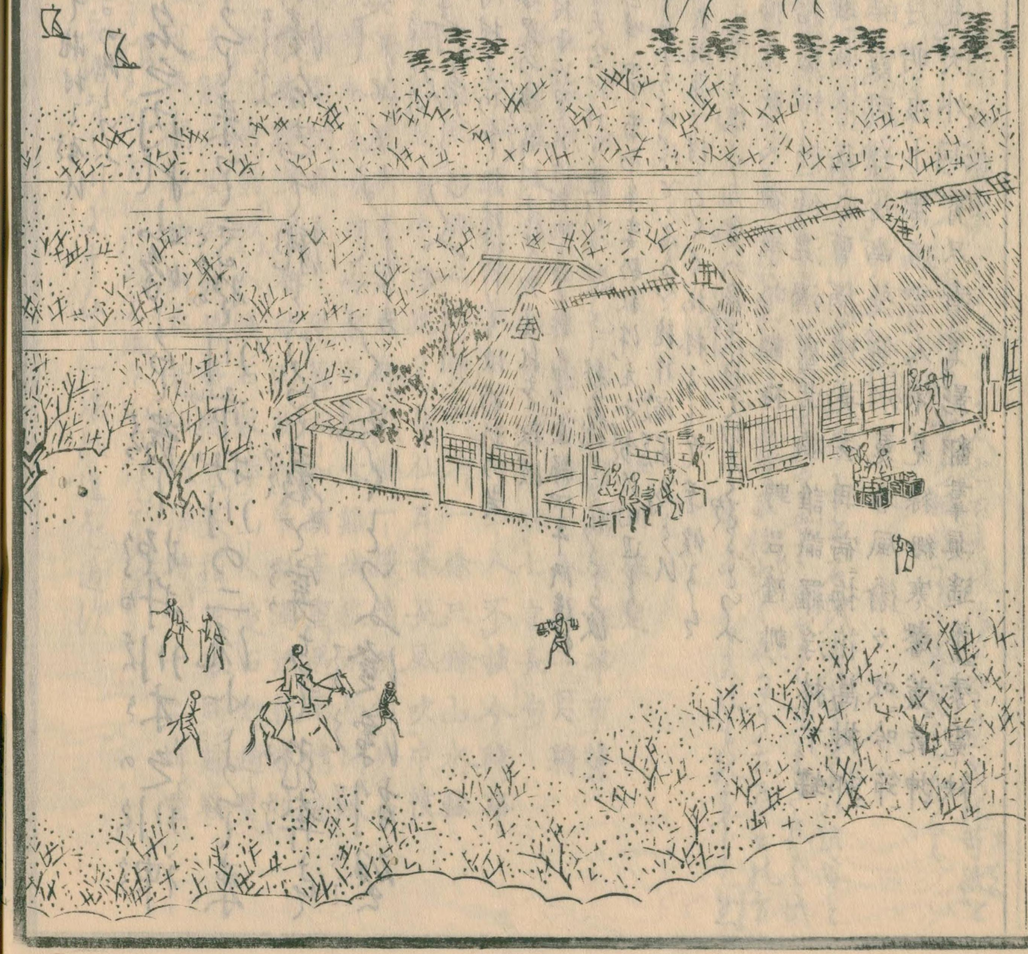
萬株梅花歌 又宿南部観梅
朝々振衣浴蘭藤插侵混濁塵世煩誰識羅浮林下蝶
永抱清香睡黄昏我亦曽摘瓊英去再宿梅花萬樹邨
夜冷獨捲皓霞臥自是幽夢屢氷竜春風徐々吹吟節
又踏横斜月明痕十里璚雲人不見縹緲寒馨薫乾坤
蕭聲不下飛天外洞霄只看鶴影翻羣眞遥挙素霓袂

野呂隆訓

植田に梅水

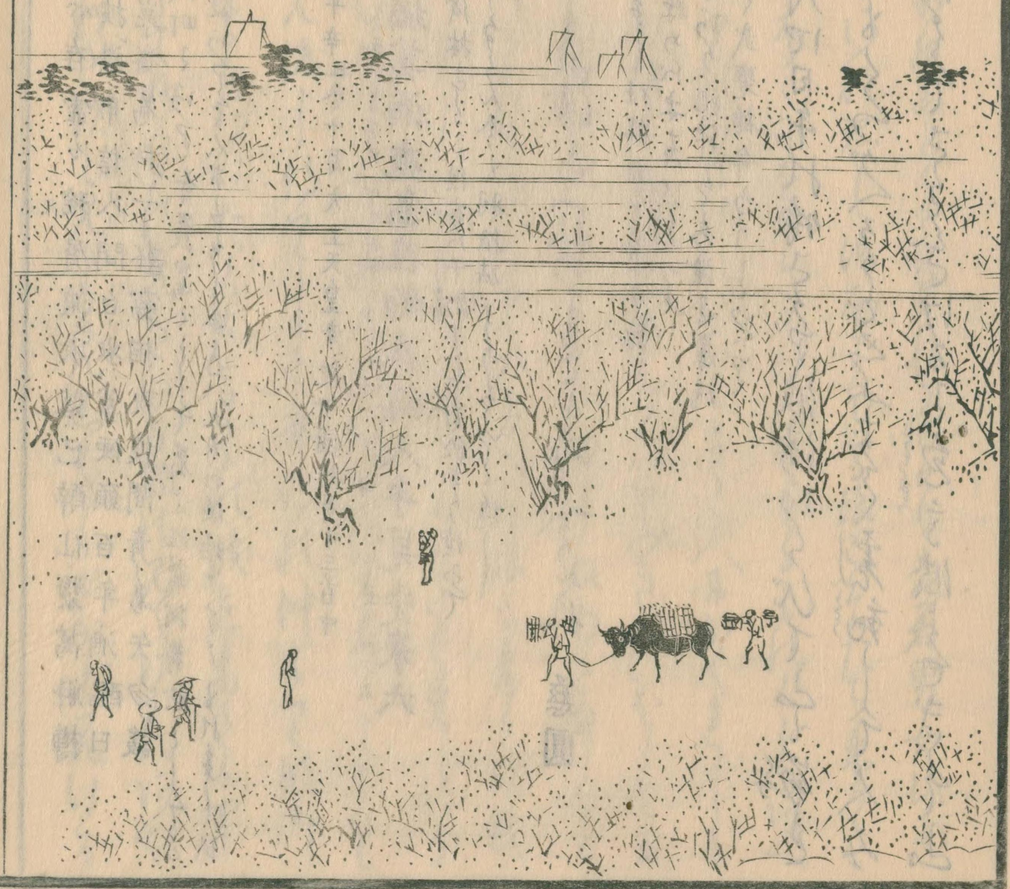
いびき
よれ雷鳴
のごとく
あり人さて
き多田の
くれぞれ
さればこそ

西田三子麿



浦ちかき
植田の
くれぞれ
いびき
くるる
くるる

中村良斎



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

来麥歳寒孤心存霏々瑤屑濺衣落已醉仙漿萬斛撙
芳縁不盡互披襟甫信入間白衣尊便頽百年酒醒日
倶朝王皇上巌崎為斟一杯寫相祝技間青鳥矢勿譲

鹿島　埴田村の坤海上八町ばかりに寺裏島あり其島の東をめぐりて神の社ありて人家をなせり
往れ船の笑大さ
してほよ

萬葉集　大宝元年辛丑冬十月太上天皇幸紀伊國時哥十三首中

三名部乃浦塩莫満鹿島在釣為海人乎見變来六

此哥は往来の船楫もるく往古人干潮おそき時より漕出て
往来せしならん今も羽根侍よりそつく辺し

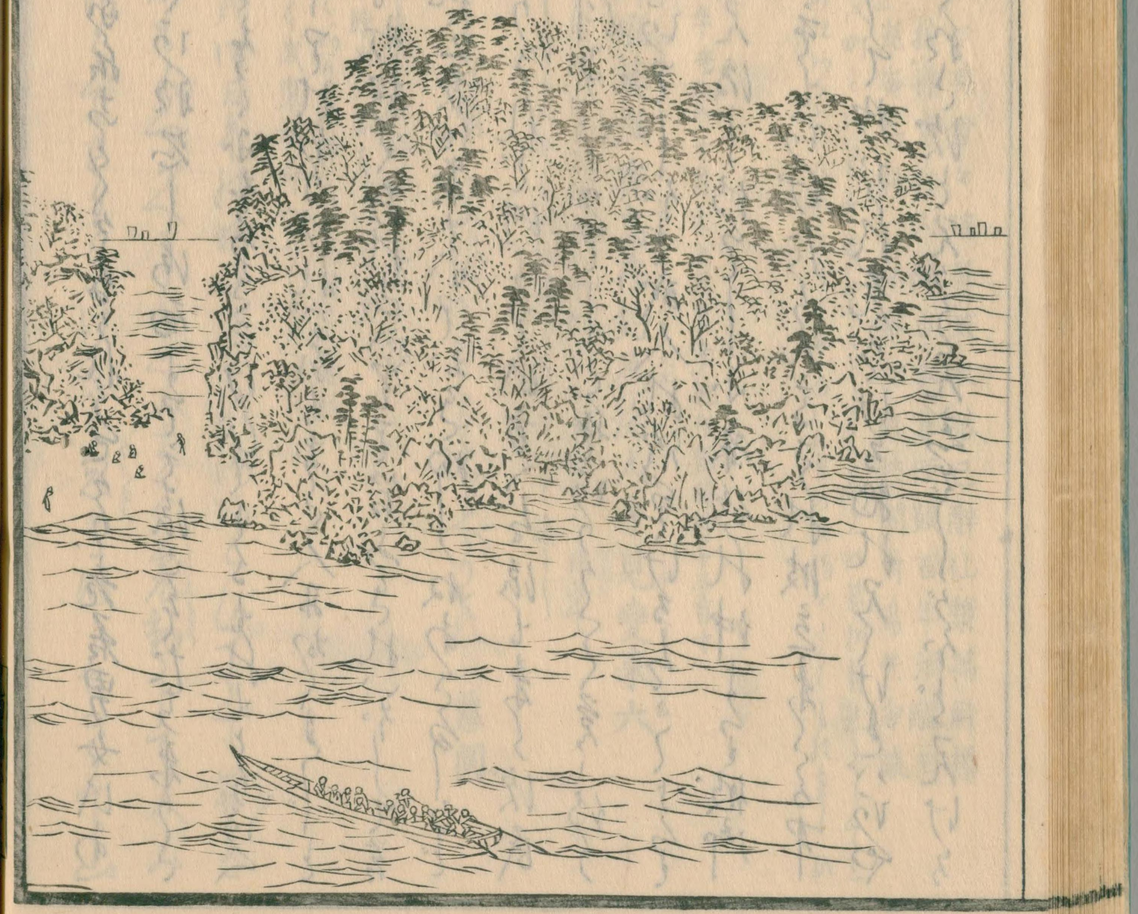
拾玉集

潮ひるま人かよはぬ浦ならば鹿島の神社なからましを

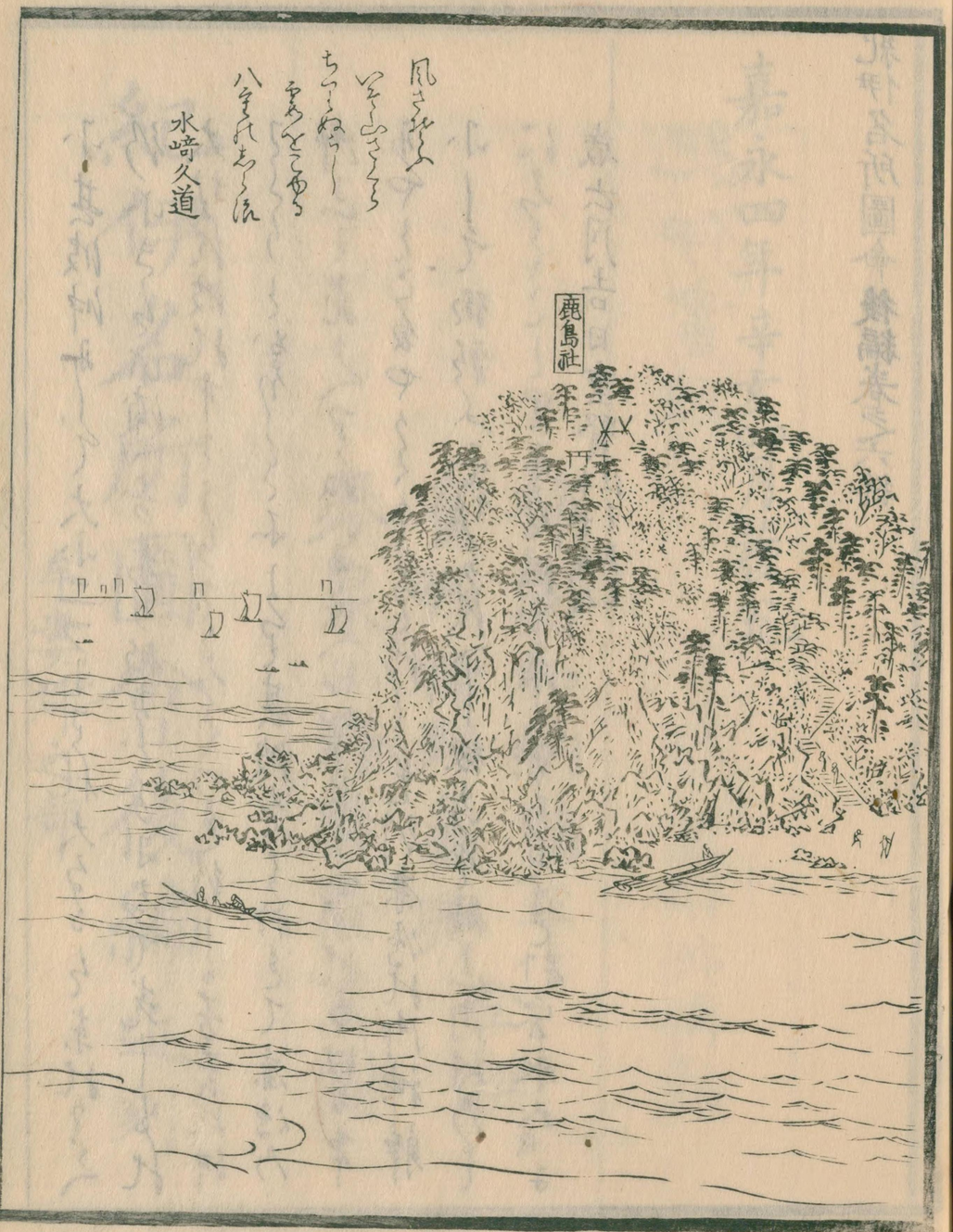
産物海馬　此辺の浦ホ多し妊婦此を喫ふと産安く脳めば安産ともいふ
鹿島の神社　往れ本ここより紀伊ともいふ澄ホ来往
重賢記云　寛永四年十月廿日午刻時さゞ波寄ひらびて山も動を
地もさの如居もくつがへるとおもふ程大に振とけるく急こう波よせきて山
内村　南新川の北西小名　北西の浦ホ多し妊婦此を喫ふと産安く脳めば安産ともいふ
又云往古人干潮おそき時より紀伊ともいふ澄ホ来往
鹿島の神社　往れ本ここより紀伊ともいふ澄ホ来往
重賢記云　寛永四年十月廿日午刻時さゞ波寄ひらびて山も動を
地もさの如居もくつがへるとおもふ程大に振とけるく急こう波よせきて山
内村　南新川の北西小名　北西の浦ホ多し妊婦此を喫ふと産安く脳めば安産ともいふ
又云往古人干潮おそき時より紀伊ともいふ澄ホ来往
鹿島の神社　往れ本ここより紀伊ともいふ澄ホ来往
重賢記云　寛永四年十月廿日午刻時さゞ波寄ひらびて山も動を
地もさの如居もくつがへるとおもふ程大に振とけるく急こう波よせきて山

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

南部鹿嶌神社



熊代繁里



水崎久道

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

小甚波沖みして大小二つ
ゐ小きらせ浦へ寄り彼
大なれ波れ中こうらくる
こうとおりこまよる
沖山こ花くへぬいみへ
みやとこ夏やくくる
小して弱弱ふせくれ
にこくこと望みを波も来
歳六月吉日重賢本出家後仕之号

紀伊名所圖會後編巻之六終

嘉永四年辛亥四月發兌

柿園加納諸平 仝撰
窪野神野易興
琴泉小野廣隆畫圖

紀伊名所圖會後編 近刻

牟婁郡之部

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

839
6
80

紀伊書肆

發行書林

江戸 須原屋茂兵衛

大坂 河内屋喜兵衛

同 河内屋太助

帶屋伊兵衛梓

紀伊国名所図会

平井五柞堂藏版書目

文部省翻刻 物理階梯	全三冊	君山著 漢畫獨醒古	全二冊
文部省翻刻 萬國通史	全九冊	大原東野編輯 名數畫譜	全四冊
牧村桓一郎編輯 萬國通史字引	全一冊	赤城先生音訓 四書正文 後藤点	全十冊
山下巖藁編輯 小學博物圖說	全四冊	岡沢徹編輯 皇國地理要略 地圖附	全三冊
今井史山著 互通用文章	全一冊	文部省翻刻 日本地誌略	全三冊

書林

和歌山本町弐丁目

平井文助

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用